

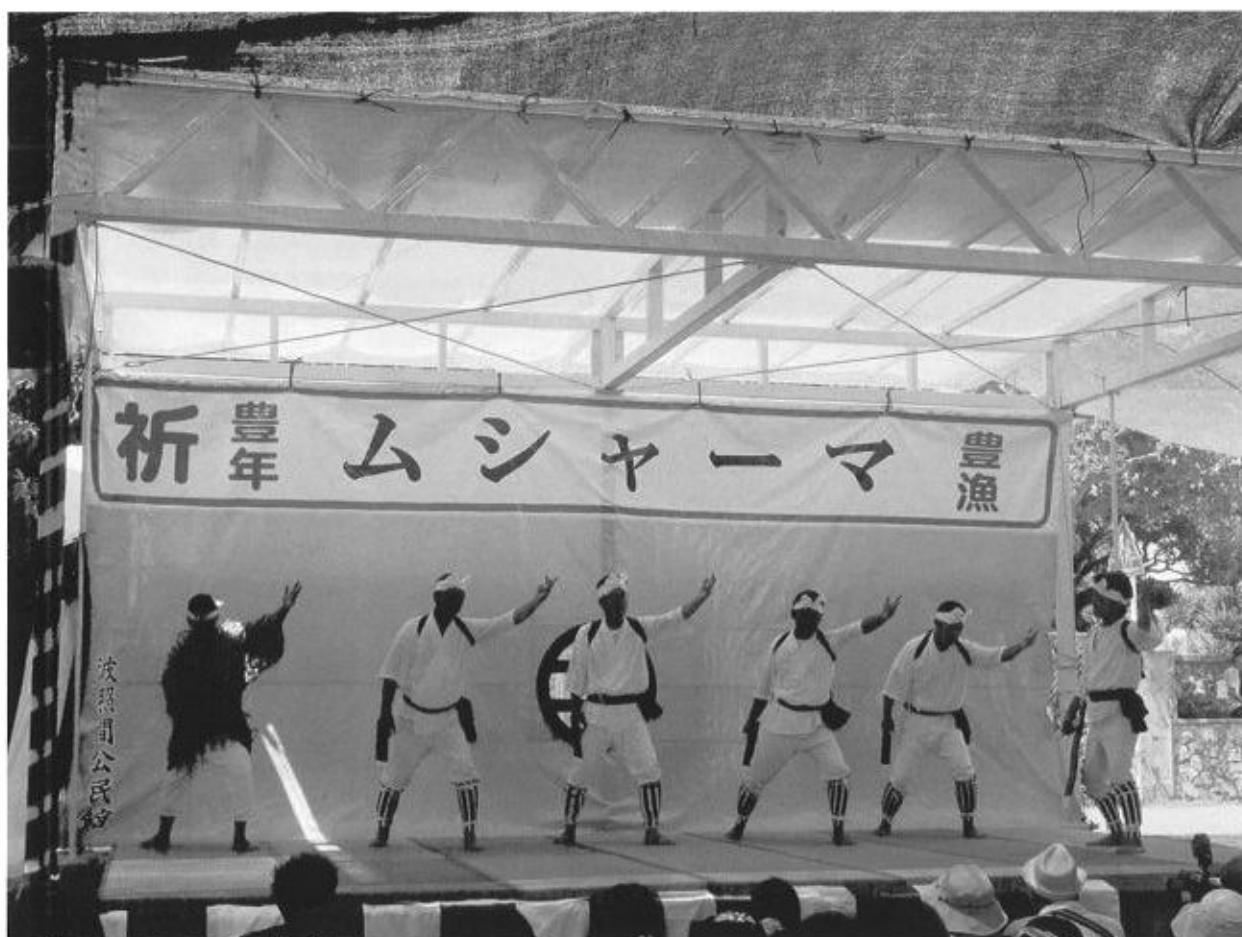
町民参加の町史づくり



竹富町史だより

第39号

2017年1月29日



竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11番地1

TEL (0980) 82-6191

目 次

第1回竹富町史島じま編シンポジウム—『竹富町史 第六巻 島間島』—	1
鳩間島の過去・現在・未来を語ろう！	
基調講演 『鳩間島の過去と未来』	大城 肇…2
《鳩間口説》の変遷	加治工真市…11
竹富町史編集係の動向	22
第34回竹富町史編集委員会開催	26
2016年度 受贈図書一覧	28
島じまの踊り・狂言〈No.1〉舞踊「船浦口説」	31
西表島古見集落の口承文芸	星野岳義…32
フクギは“LUCKY TREES”	陳 碧霞…39
竹富町史の刊行物一覧	40
編集後記	41

表紙の写真

表紙の写真是旧盆の中日に波照間島のムシャーマで行なわれた西組の一場面（狂言）での一場面（2016年8月16日）。兄方、下男、若者4名によるヘラを持って演じられる狂言である。午前の前組、西組、東組の仮装行列に続き、午後の部では舞台を中心として舞踊、狂言、コームッサなどが披露された。

第1回竹富町史島じま編シンポジウム

—『竹富町史 第六巻 島間島』—

島間島の過去・現在・未来を語ろう！

旧正月、おめでとうございます。

さて、台風16号の接近に伴い延期となっていた、シンポジウム「島間島の過去・現在・未来を語ろう！」が、2017年1月29日（日）に石垣市民会館中ホールにおいて、開催されます。

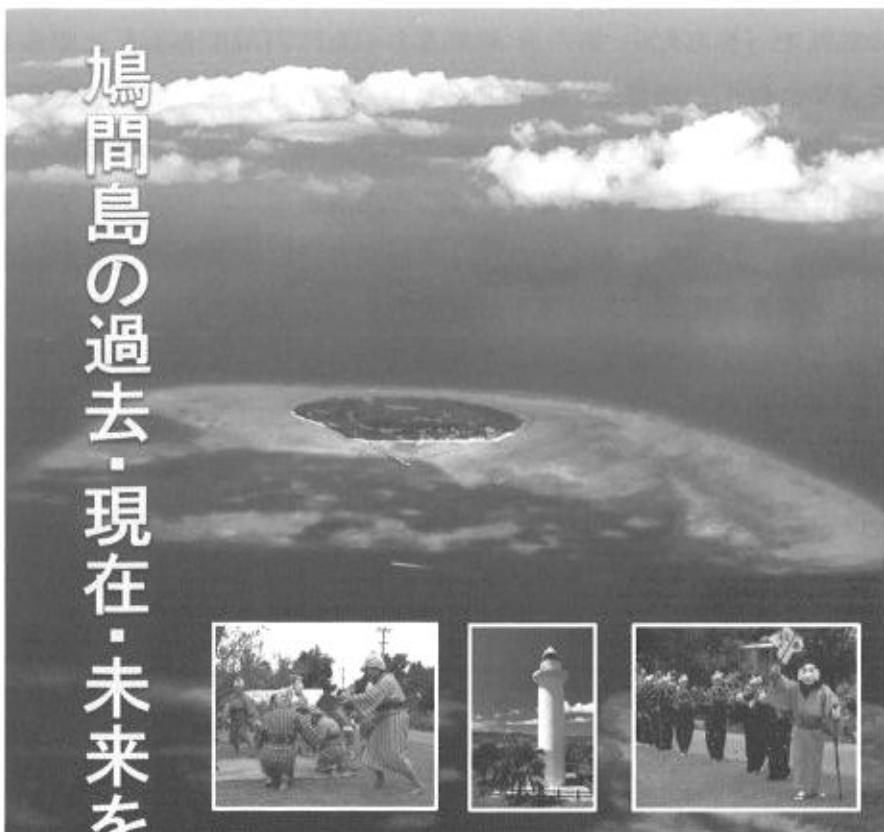
竹富町史編集室がでて今年で27年目になります。その間、竹富町に関する「写真集」、「資料編」など、20冊を刊行してきました。編集事業の中心である「島じま編」も『竹富島』（第二巻）、『小浜島』（第三巻）、『新城島』（第五巻）、『島間島』（第六巻）と4冊の発刊を済ませ、ただ今、『波照間島』（第七巻）発刊に向けて編集中です。

本シンポジウムは既刊書の活用を目的として開催されます。多くの町民、市民にご来場いただき、『竹富町史 第六巻 島間島』を深めると同時に、竹富町の歴史と文化に親しんでいただきたく存じます。

第1部の基調講演は、大城肇氏「島間島の過去と未来」、得能壽美氏「近世島間島の民衆生活と通耕」の2題です。前者は『竹富町史だより』（本号）、後者は同書（第38号）に大要を収録していますので、御参考ください。

第2部は島間島編の専門部会委員がパネラーとして登壇し、パネルディスカッションが行われます。会場の皆さんも交えて、「島間島の過去・現在・未来」を語ることができます。

多くのご来場をお待ちしています。



竹富町史島じま編 シンポジウム 『竹富町史 第六巻 島間島』

日時：2017年1月29日（日）午後2時～午後5時

場所：石垣市民会館中ホール 主催：竹富町教育委員会

第1部 基調講演

- ・大城肇（琉球大学学長） 「島間島の過去と未来」
- ・得能壽美（法政大学大学院講師） 「近世島間島の民衆生活と通耕」

第2部 パネルディスカッション

- ・ガイダンス 吉川安一（名城大学名誉教授）
- ・言語分野 加治工真市（沖縄県立芸術大学名誉教授）
- ・自然分野 島袋憲一（元竹富町教育委員会教育長）
- ・芸能分野 大城學（琉球大学教授）
- ・コーディネーター 吉川英治（元県立八重山高等学校校長）

竹富町史島じま編シンポジウム
—『竹富町史 第六巻 鳩間島』—

基調講演

鳩間島の過去と未来

大城 肇（琉球大学学長）

はじめに

本日、私に与えられたテーマは、「鳩間島の過去と未来」ということですが、時間が限られていること、このテーマはこの後のシンポジウムでも話題になると思いますので、ここでは私の独断で『竹富町史 第六巻 鳩間島』（以下、『鳩間島編』と略称します）をとりまとめた感想を含め、以下の項目についてお話しします。まとまりのない話になることを予めお断りしておきますが、本日の話は、おおむね以下のように進めます。

- はじめに
1. 島の季節の香り・トビイカ
 2. 鳩間島編をまとめるまでの苦労
 3. 鳩間島の概況
 4. 島を支える三つの社会資本
 5. なぜ鳩間島に人は住み続けたのか
 6. 鳩間島の今後
- むすびにかえて

1. 島の季節の香り・トビイカ

もともとこのシンポジウムは、昨年の9月中旬・中秋節の頃に実施される予定でした。中秋十五夜の頃の鳩間島を思い出した時に真っ先に浮かぶのがトビイカの香りでした。その話から始めようと思っていたので、季節外れになってしましましたが、そのまま話を進めたいと思います。あしからずご了承下さい。

中秋節の頃は、鳩間島では空気が澄みきった季節となり、イガメー（イカ釣り漁）がパンジン（最盛期）となります。海岸端ではスルメを干した光景が漁村風景を醸しだし、甘いスルメの香りが島中に満ちていました。イカの刺身やイカ墨の塩辛は、ウンヌイ（蒸かした芋）と相性のよい季節の風物詩でした。残念ながら、このような季節を感じる風景は、現在、島から無

くなってしまいました。

トビイカ漁は、カツオ漁業やツノマタ養殖業と並んで、鳩間島のくらしを支える水産業でした。鳩間島は、西側に黒潮海流が流れています、島を囲む形でサンゴ礁海域が広がっているので、トビイカやカツオ、ツノマタなどの漁場として有利な地理的条件を持っていました。1887年(明治20)頃には、鳩間島近海が豊富な水産資源をもつ漁場として、沖縄本島では知られていました。

1903年(明治36)頃より糸満の漁業者が渡来して操業したのが、鳩間島におけるトビイカ漁の始まりです。翌年から島の人々も、漁法を学んで10隻余りが操業したようです。1905年(明治38)頃には、糸満をはじめ奥武島、久高島、宮古島などから100隻余りの漁業者が鳩間島の民家を借りて、3~4ヶ月間、滞在して操業していました。当時の鳩間島の人口は、230人前後で栄えていました。

このように島外から来た人々は、単に漁をするだけでなく、島の人々へ漁法や製造法の教習、サバニの払い下げ、民間療法の伝授などを通じて、島社会に大きな影響を及ぼしました。また、当時の鳩間島は、各戸ともフクギなどの屋敷林を植えていて、ヤンバルみたいな緑の豊かな島でした。しかし、木が多いことは木陰が多いので、イカを乾燥するには不都合でした。そこで、前之浜の東側に広がっていた官有地に乾燥場を作る計画が持ち上がりましたが、その計画は頓挫しました。乾燥場ができていたら、イカ漁の本格的な南の拠点になっていたかもしれません。なお、滞在者の飲料水は、西表島から運んで給水していました。

スルメは、1907年(明治40)頃の沖縄県の輸出品の中で主要な位置を占めていました。昭和初期には、当時の竹富村の財政疲弊救済策の一つとして、鳩間島のスルメやフカヒレなどを台湾へ輸出すべきであるという提案もなされました。

イカ釣り漁は、サバニ1隻に1人ないし2人が乗り込み、夕方にカツオ漁船に曳航されて出漁し、夜間にイガメーランプ(イカ漁用石油ランプ)を灯して夜間に操業し、明け方に島へ戻ってきました。そのような中、1948年(昭和23)8月25日に「鳩間島沖の珍事」が起きました。雑節のひとつで厄日とか荒れ日などといわれる二百十日頃に当たっていました。折しも低気圧が発生し、52隻のうち14隻、27名が行方不明になった事件です。幸いにも、全員救助されましたが、漁業の島・鳩間島ならではの珍事件でした。

冒頭でトビイカ漁の話を紹介したのは、島の優位性(得意分野)を生かして、鳩間島が沖縄県下にその名を轟かせた時期があったことを紹介したかったためです。

2. 『鳩間島編』をまとめるまでの苦労

私は、経済学が専門分野であることもあって、元々、先を予測するのが楽しくて、歴史は好きになれない性分でした。過去を振り返ることは、反省や教訓を得るという意味で重要ですが、歴史をやっている私の周りにいた人々は、過去の時点で留まっていて、なかなか現在まで来ない人が多いように見えました。また、歴史の解釈はいろいろあり、支配者の都合のよい解釈が通説化しているようにみえました。そのような意味で、歴史は苦手分野でした。

それが、町史編集室から鳩間島編の専門員になってほしいという依頼があり、改めて生まれ島の過去を振り返るいい機会だと思い、安請けてしまいました。その直後に、大学の理事・副学長、学長を引き受けることになり、町史編集委員になったことを後悔するとともに、『鳩間島編』の原稿提出が大幅に遅れ、発刊が2年近く大幅に遅れたことを申し訳なく思った次第です。

さて、私は島を「くらし」の総体として捉えています。島のくらしは自然生態系をベースに成り立ち、祭りや文化とも切っても切れない関係にあります。『鳩間島編』の700頁を超える内容が鳩間島のくらしの総体を文章にしたものであり、構成している各項目はくらしの断面を切り取ったものになっています。鳩間島編の本文は、後でじっくりご覧になって下さい。

『鳩間島編』をまとめるに当たって、まず初めに突き当たったのが、鳩間島に関する史資料や文献があまりにも少ないとということでした。西表島や竹富島、波照間島などに関する史資料や書籍はたくさんありますが、鳩間島に関しては少ない状態でした。そこで、私がとった方針は、可能な限り過去の新聞で鳩間島に関する記事を丹念にチェックし、過去に起こった事象を淡々と記述することでした。

町史あるいは島々編を執筆する際の編集方針は、通説になっていることを記述し、執筆者個人の独自の見解は控えるようにということでした。これは、私にとっては幸いでした。そうであるならば、鳩間島について書かれた新聞の記事や紀行文、旅行記などを、私の主観を入れずに紹介し、その解釈は読者あるいは後の研究者に任せようということにしました。したがって、得能さんのような歴史の専門家から見ると、全くの素人による作文になってしまっていると思います。

もう一点は、私は、通説を確認するために、関連する先行研究に目を通すことにしました。しかし、残念ながら仮説（仮説というのは事実や現象を説明するために仮に設定した考えです）、あるいは伝承などに関する特定の個人の聞き取り調査をもとに仮説を立てただけで、その仮説を検証（検証というのはしっかりした裏付け調査等を行うことです）することなく、その仮説が定説であるかのように主張する執筆者もおりました。そこが、町史と研究論文の違うところですが、すべての執筆者に十分に理解されていなかったようです。

それから、個人的に分析してみたいと思っていて、できなかつたことが二つありました。一つは、土地台帳の分析です。土地台帳をめくって、鳩間島あるいは西表島にある鳩間島住民の土地の所有や土地利用、作目の変遷を追ってみたいと思っていました。もう一つは、議会議事録を丹念に読みこなして、鳩間島に対する政策決定のプロセスを確認したいと思っていました。一部は、新聞記事の確認ということで利用しましたが、土地台帳と議会議事録のチェックは、時間的制約で断念せざるを得ませんでした。

3. 鳩間島の概況

鳩間島は、沖縄県八重山郡竹富町を構成する有人9島の一つです。鳩間島の南約5kmに西表島、東約25kmに石垣島を望むことができます。鳩間島の面積は0.96km²で竹富町面積のわずか0.3%を占めるに過ぎません。島の周囲（海岸延長線）は3.9kmであり、小学校の遠足は島一周ということが定番でした。鳩間島は、琉球石灰岩で構成される米粒状の平坦な島であり、最高標高は中森の33.8mです。なお、鳩間島の田地が西表島の北岸に広がっていたこともあり、島の人々の生活圏は意識も含めて広いものがありました。

鳩間島の「はとま」は、島の言葉では「パトゥマ」、徐葆光『中山伝信録』では「巴度麻」（日語訳では「波渡間」）、『サマラン号来航記』には「Hatoma」、『水路誌』には「アイサック島」と表記されています。

『中山伝信録』の「巴」は「平らに開く」などの意を含みます。「度」は「一步一步と水を渡る」と同系の言葉であり、「麻」は「間」と同じく場所を表わし「島」の義であり、中国の山に当たります。したがって、「巴度麻」は「海を渡っていく平らな島」（波渡間）を含意しています。ちなみに、「パトゥマ」を言霊的に解釈すると、「母港としての生活基盤の確立」を意味し、その中心にあるのが聖地・御嶽であり、もう一つは知性のエネルギーです。

さて、その社会の総てのものが集約されて現れるのが人口です。以下、鳩間島の人口の動きをみて島の概況の説明とします。鳩間島にいつ頃から人々が住みついたのか、については断定できる明確な史資料はないが、11世紀末・12世紀初頭まで続いた無土器時代の遺跡として、大泊貝塚と屋良貝塚があります。その頃、海岸近くに人は住み、海の魚貝類や野山の獲物を食べて生活していたと考えられます。また、中森貝塚からわかるることは、15世紀頃には、中森を中心とした丘陵地にまで生活の痕跡が広がっていたことです。

牧野清さんによれば、鳩間村は「西表島のヒナイ村から、六名の移住者によって建てられたといわれている」ということです。1651年の人口統計によれば、鳩間・ひけ川二村の人口が70人でしたが、その頃は古見間切の管轄となっていました。《バガパトゥマジラマ》に謡われているように、その頃は公務や上納のために古見村へ往来するのにたいへん難儀を極めていたそうです。その後、1701年に黒島保里村から60人余りが移住して、人口が100人余りになったので、1703年9月に首里王府の許可を得て独立村となっています。鳩間島が独立村になって、今年は314年目に当たります。

最初の人口統計が現れる1651年から現在までの366年間で、鳩間島は2度の人口増加期と2度の人口減少期を経験しております。第1人口増加期は、1651年から1761年までの110年間でした。1651年の70人から1761年の513人まで、110年間で7.3倍の人口増加がみられました。その要因として、黒島や古見などから移住があったこと、稲作を中心とした農耕と採集漁が主な生業としてくらしを支え、伝染病・風土病などの犠牲も少なかったことが挙げられます。

それから約110年という同じ年数を経て、琉球処分直前の1872年には人口は5分の1の110人まで減少しています（第1人口減少期）。人口減少の要因は、人頭税で生活が苦しい上に、疫

病の流行と干ばつなどによる飢饉の発生が相次いで起こったためでした。

その後は、1949年の645人まで第2人口増加期に入ります。この大正時代から戦後までの約80年間の人口増加を支えていたのは、半農半漁といわれる稻作や製糖業などの農業と、カツオ漁やイカ釣り漁、ツノマタ養殖業の水産業でした。狭い農耕地と広い漁場を利用した、典型的な半農半漁の産業形態でした。

1950年から1974年まで第2人口減少期に入ります。特に、全国的な高度経済成長期に入った1960年代中頃から人口減少が顕在化し、日本復帰をまたいで1974年には鳩間島の人口は過去最低の33人を記録しました。

1975年から現在に至る40年余、人口停滞期が続いています。人口は50～60人前後で停滞し、高齢化が進んできたのが現状です。果たして、鳩間島は第3人口増加期を迎えることができるのか、今はたいへん重要な岐路に立っていると言えます。

4. 島を支える三つの社会資本

島から学校がなくなると、島の人たちの心の拠り所がなくなり、無人島になる日が現実問題として突きつけられてきます。鳩間島においては、島の住民の心の拠り所となるものが、学校のほか、郵便局と定期船だと思います。この三つは、島にとっての最も重要な社会資本です。

昨年、鳩間小学校が創立120周年の佳節を迎えたことに対して、改めて心から祝福いたします。鳩間小学校は、1896年（明治29）6月19日に大川尋常小学校鳩間分校として設置されました。鳩間島における最初の教育機関です。昨年は、1896年から数えて120年目に当たったのです。鳩間小学校は、その後、1901年（明治34）に大川尋常小学校鳩間分教場、1906年（明治39）に西表尋常小学校鳩間分教場、そして1907年（明治40）鳩間尋常小学校と校名を改めました。児童数が増え、学級数を増やす必要があったためと思われます。校長は、石垣信幸先生でした。

大正時代に入り、1924年（大正13）に宜野座安知先生が校長として奥さんの代用教員・宜野座富先生とともに赴任しています。1927年（昭和2）には、宜野座校長の後任として竹富村長にもなった山田武三先生が赴任し、設立当初からの茅葺き小屋であった校舎を瓦葺き屋根に建て替えております。

時代は下って、1941年（昭和16）に国民学校令が施行され、竹富村鳩間国民学校と改称しました。同時に、高等科が併置され開校しております。その後、鳩間島にも戦争の足音が迫り、空襲の恐れがあるため、1945年（昭和20）3月10日に「対岸ニ避難ス（東ハ赤離ヨリ、西ハ上原ウボダ）」として、西表島に避難しております。同年6月15日、宇江城正喜校長先生は船浦から西水に小舟で避難中に敵機の爆撃を受けて殉職されました。

戦後、1949年（昭和24）に新学制が実施され、校名を鳩間小学校に変更し、現在に至っています。同年、鳩間中学校が設置認可され、鳩間小学校に併置されました。

1970年代になると、島の人口減少が激しくなり、1974年（昭和49）には、児童数が1人まで減少しました。その後、里親制度を利用して里子を引き受けたりしながら児童生徒数の維持に

努めてきましたが、つねに廃校の危機に直面し、現在に至っています。

郵便局は、1972年（昭和47）の日本復帰後、1981年（昭和56）に簡易郵便局となって存続しています。鳩間島に特定郵便局ができたのは、1940年（昭和15）です。それ以前は、郵便物託送依頼人あるいは郵便物請負人の制度でした。昭和の初期には、鳩間に役人や他島の人が出張訪問したときの宿泊先は、郵便物請負人であった新城安信さんや友利盛喜さん、通事浩さんの家でした。特定郵便局の初代局長は友利（田代）浩さんで、1956年（昭和31）まで務めました。その後を継いだのが弟の田代茂夫さんでした。日本復帰以前は、郵便局が電信業務も行っていました。

鳩間島と石垣島間で定期船が就航したのは、昭和に入ってまもなくの1929年（昭和4）12月の海徳丸でした。人口が増え出した頃で、人口は400人を超えていました。その後、鳩間丸、藤吉丸、住吉丸、平成丸などが定期船として活躍しました。

最初の頃は週に1～2度の頻度で就航していました。人口が減ると、島で必要な生活物資の量も減るので、定期航路も採算性を重視せざるをえず、運行回数を減便することになりました。1980年代から90年代には、〔人口減→運行回数の減→不便&人口減→…〕という悪循環が続きました。

21世紀に入って、鳩間島音楽祭のPR効果などもあって、観光客が訪れるようになり、流動人口（観光客）が増えて、定期船に加え、高速船も就航するようになりました。

1703年に独立村になって314年、小学校ができて121年、郵便局ができて77年になる鳩間島。人々のくらしが連綿として続いてきたこの島を無人島にしてはならない、というのが鳩間島で生を受けた者の共通の思いではないかと考えています。

5. なぜ鳩間島に人は住み続けたのか

面積が1km²に満たない小さな鳩間島。全国の「離島」と呼ばれる他の多くの島々同様に、鳩間島は条件不利地域の一つです。日本経済が高度成長期に入った1960年代半ばから過疎化が進行し、人口が漸減して今日に至っています。人口が減ったため、島の祭祀や産業活動の担い手が不足する中、島全体が停滞し、その結果、人口が流失し過疎化がさらに進行するという衰退の悪循環メカニズムを経験してきました。この悪循環は、今後も続くのでしょうか。

広大な土地を有し、水に不自由することのない豊かな島・西表島を目の前にしながら、狭小で生活用水に事欠き、農地もやせ、干ばつや台風などの自然災害に苛まれてきた鳩間島に、1703年の村建て前から人々は住み続けてきました。この島のどこに、人々を長年にわたって住まわし続ける魅力があったのか。

これは、『鳩間島編』を書き上げる作業の中で私が一貫して持ち続けた「疑問」ですが、残念ながらその答えを明記しませんでした。一般論として、「物質的不自由さを補ってなお余りある精神的豊かさがこの島にはあったのであろう」と記述するにとどめました。では、その精神的豊かさを支えたのは何だったのでしょうか。

まず一つは、水のない島のプラス面があったということです。確かに鳩間島は河川のない島

であったことから水資源に乏しく、そのため蚊の幼虫であるボウフラの生息環境が悪く、マラリアやデング熱、フィラリアなど蚊が媒介する風土病・伝染病の発生率が低かったことが挙げられます。もちろん、蚊は生息していましたが、たとえばマラリアについては無病地区に指定されていました。健康でいられるこの島で、人々は住み続けたのでしょうか。

二つ目は、広大な西表島が目の前に広がっていたことです。鳩間島の住民は、蚊の多い西表島に飛作地の田地や牧草地を有していましたが、通耕することができたので常住（移住）する必要がなく、しかも距離的に4～5kmと適当な間を置いていたことが幸いしたと思います。西表島からは稻だけでなく、タコや貝類などの海産物や木材類、水、野草類などを必要に応じて調達することができました。そして、何よりも南の海上に広がる西表島の島影は、鳩間島に住む人々に精神的な安心感を与えたのではないかと思います。四方に島影のない絶海の孤島とは違う風景がありました。

三つ目は、鳩間島のもつポテンシャル（潜在的可能性）です。鳩間島がトビイカやカツオの豊かな沖合の漁場を有していたことは、大正年間には沖縄本島の漁師に知れ渡っていましたが、沖合同様に島の沿岸の豊かなイノーから海の幸を自給できたことです。海産物の多くが人頭税の対象にならなかったので、食糧調達面で恵まれた海域をもっていたことが幸いしたと考えます。

太平洋戦争後、1960年代中頃まで稻作とカツオ漁とツノマタ養殖が島の暮らしを支え、学校が存続し、祭りが継承できたのは、鳩間島の優位性を生かしたことが大きかったと思われます。ここに、鳩間島の今後を考える時のヒントが隠されています。

6. 鳩間島の今後

それでは、鳩間島を無人島にしないために、私たちは、今、何をしなければならないか。

『鳩間島編』の序論と結論は、吉川安一先生が起案されました。失礼ながら、吉川先生の玉稿に手を入れて、未来志向の内容を書き加え、鳩間島編専門部会の名前で書き残すことにしました。鳩間島の今後について皆さんと一緒に考えるきっかけとして、私が書き足した序論と結論の中の私の考えを紹介して、後のディスカッションにつなげたいと思います。

当初、『鳩間島編』のタイトルは、「神の島（カンヌシマ）鳩間島」でした。タイトルを検討した会議に私は複数回欠席しましたので、欠席した者が異議を唱えるのは如何か、ということで案の段階では黙っていました。しかし、最終的に「神の島」で決まりそうでしたので、対案を出すことにしました。

私の考えは、現状を見ると、「神の島」という言葉を使うのは町内の他の島々と比べてたいへん恐れ多くおこがましいこと、また、その根拠として挙っている伝承の例が弱いということに基づいていました。そこで、私は伊波南哲さんが作詩した、《鳩間校校歌》の一節を提案しました。結局、両論併記の形となり、「神の島（カンヌシマ）夢の通い路 鳩間島」と五七五調の酔っ払い川柳のようになりました。

とはいって、「神の島」というからには、神の島に相応しい風格が鳩間島に行けば誰もが体感

できるということでなければいけません。神秘的なたたずまい、掃き清められた集落、行き交う島の人々の清々しさ、などといった島の魅力を醸し出さなければなりません。それが島の将来像であり、そのような風格の島が実現できれば、鳩間島は「神の島」として、多くの人々の「夢の通い路」となって発展すること間違いないでしょう。

鳩間島の現状は、限界集落的な要素が強く、有人島としてやっと持ちこたえている島であると言ってよいかと思います。これまでの行政による施策や住民による島おこしの成果の集約が鳩間島の現況に反映されていると言えますが、それはさらなる衰退を余儀なくさせる行き詰まりであり限界であると解釈するのではなく、今はまさに島を創生するチャンスと捉えたいと思います。

鳩間島が存続し持続的に発展するためには、行政、島の住民、島出身の郷友が一体となって、前向きに常に根源なるものを見つめ、真摯に取り組み、前へ進んでいくプロセスを作っていくことが重要です。そのことによってのみ、「夢の通い路 鳩間島」の第二幕が開かれるのです。

鳩間島の新たな創生の軸となる「夢」を皆でいま一度構想し、その夢に向かって、現状を打破し先へ進む情熱とエネルギー、そしてロマンをもつことが大切です。そのことにより、再び夢が通い合う鳩間島の未来を創る扉が開かれることを願うとともに、波濤を越えて不死鳥のごとく、我がふるさと・鳩間島が起死回生するような知恵を出さなければなりません。

昆虫や爬虫類などもそうですが、脱皮しなければ生き延びていけません。現状を変革し変えていかなければ、島は存続していくことはできません。

しかし、鳩間島の現状を良くするように変えていくことは至難の業です。皆さんもご存知だと思いますが、多くの島の先輩たちが、たとえば定年退職後、あるいは現在の仕事を辞めて島に戻り、住みよい島に変えていこうと意気込んで、下見に帰省したものの、島から帰ってくると、彼等の夢が無残にも幻想に変わってしまった例がいくつもあります。たいへん残念なことです。何がそうさせたのか。

そこで、最後に提案をいたします。まず、50年後の鳩間島をどう考えるのか。失礼ですが、私を含め、本日ここにいる多くの皆さんはその時まで生きながらえている人は少ないでしょう。もしかすると、「今は野生のヤギしかいないが、二昔前には、鳩間島には人も住んでいたらしいですね。」ということになっているかもしれません。これは、たいへん寂しい話です。

このような最悪のシナリオにならないよう、もっと夢のある島の姿を描こうではありませんか。そのために、「ふるさと鳩間島創生委員会」（仮称）をつくり、その委員会で個人の利害を超えた島の将来ビジョンを作り、それを実現するための具体的な戦略を考えて、その案をもとに町当局や町議会に要請しようではありませんか。

むすびにかえて

最後に、竹富町の今後に対する私の思いを簡単に述べたいと思います。竹富町は、有人9島からなる行政区です。このことは竹富町の強みであり、各島々がそれぞれの特徴を發揮して光り輝くことが竹富町の特徴となり強みとなります。

町の抱える課題はたくさんあるかと思います。町内に山積する課題を、町長を先頭に役場職員、町会議員、そして町民が力を合わせて克服しようとしているのか。どうでしょうか。

2013年（平成25）3月の南の島空港開港を記念した「全国やいまびとぅ大会」のシンポジウムで、私は「足を引っ張るな！　どうせ引っ張るなら手を引っ張れ！」と申し上げました。どうですか、相変わらず足の引っ張り合いをしていませんか。自分の利害勘定を乗り越えて、手を携えていかなければ、みんなの満足を高めるまちづくりはできないと思っています。

その時重要なのは、今ではなく将来を見据えた見識です。沖縄には「ヌチドゥタカラ（生命が宝）」という珠玉の言葉があります。私は次のように言い換えたいと思います。本邦初公開です。「ヌチヌユヌ ヌチドゥタカラ（後世の生命（いのち）が宝）」です。我ながら、いい言葉ですね。「ヌチ（後の）」と「ヌチ（いのち）」を掛けていますが、こう言い換えると、持続可能な発展そのものを表します。

持続可能な発展(Sustainable development)というのは、環境や資源を守りながら、現在だけでなく将来の世代の生活をも豊かにしようという考え方です。国連で推奨されている開発の考え方です。

たとえば、竹富町では役場移転について民意が示されたが、現在の世代のためだけではなく、将来の世代のために今何をすべきかを考えて、将来に禍根を残すことのないような戦略を練り、最善の政策を展開してもらいたいです。

「ヌチヌユヌ ヌチドゥタカラ」の精神でもって、「足を引っ張るのではなく、手を引っ張りましょう」ということを述べて、私の拙い話を締めたいと思います。ご静聴、ありがとうございました。

《鳩間口説》の変遷

沖縄県立芸術大学名誉教授

加治工真市

1 はじめに

『竹富町史 第六巻 鳩間島』（2015年刊行、以下、『鳩間島』）の出版を心から喜ぶとともに、町長をはじめ、教育長、担当課長、町史編集係の皆さん、町史編集委員会のご協力に篤くお礼申し上げる。

さて、『鳩間島』の第6章「祭祀と歌謡」は、大城學氏が長年にわたって鳩間島の祭祀と歌謡の関係について研究し、それを基本にして記述した優れた研究成果である。今後の鳩間島の歌謡研究は『鳩間島』を底本とし、流布本との校合研究を実施することによって推進されるべきものと考える。

最近、田代浩和氏によって、石垣市立図書館所蔵の古文書「新本家文書一組踊集・忠孝婦人八重瀬、家訓歌語並萬口説集一」（袖山仮筆者新本仁屋、1859年）のなかの、《鳩間口説》が発見され、流布本と比較校合する研究が試みられている。一方、飯田泰彦氏は『沖縄芸術の科学』〈第28号〉において、「《鳩間節》の展開とその背景」を発表し、比較研究の重要性を実証している。そこで筆者は、『鳩間島』所収の《鳩間口説》の解説で、「未詳語」として残された語彙や文法表現、音韻論などの言語学的手法を駆使しながら、《鳩間口説》の変遷過程を調べ、その原形に迫ることにする。

2 歌謡の言語学

スイスの言語学者・F=de=ソシュール（1857–1913年）は、（1）パロール（無限に変化する連続体としての言語現象〈言語生活面〉）と、（2）ラング（一定にして有限の区別できる言語単位〈音韻〉）を認め、「ラングは概念を表す記号の体系」と規定している。そして記号の本質は「表すもの」（記号表現）〈音声〉と「表されるもの」（記号内容）〈意味〉からできているとし、音声と意味の結びつきは「恣意的」〈約束ごと〉であり、「社会的」であると規定した。

アメリカの構造言語学者・ブルームフィールド（1887–1949年）は、言語の機能を刺激(S)と反応(R)の図式で次のように説明している（『言語』三宅鴻・日野資純／訳、大修館書店、1962年）。

- ①ことばによらない反応 S→R
- ②ことばによる反応 S→ r……s →R

この図式における<r……s>の部分は、言語音が空气中を伝わっていく物理現象と、聞き手の耳の鼓膜を振動させて記号（言語音）の持つ意味を脳に喚起させる過程を示している。これは、話し手と聞き手の間に1mmでも1cmでも距離が存在するかぎり、言語音は外気の影響を受けて

変化することを示している。

この観点に従えば、言葉は親子の間においても、親の言葉がまったく変化を受けることなく子どもへ伝わることはないことを表している。話者と聞き手の間に1mmでも1cmでも空間が存在するかぎり、言語は宿命的に変化するものであるといえる。

歌謡（民謡）は言語で作られており、口から口へと伝えられた口承文芸であるから、言語と同様、世代を重ねるに従って、宿命的に変化していくものである。

米盛クヤマ氏や花城イガ氏によると、鳩間島では1955年（昭和30）ごろまで、ユーニガイの後にサカサ（神司）やティジリビ（手摺部）たちは、揃って神歌の練習をされたという。神歌や歌謡はまさに口から口へと伝えられていたのである。歌謡、民謡が記録されたのは、鳩間島では古くなく、昭和期に入ってからであろう。

3 《鳩間口説》の変遷

今のところ、158年前に筆写された「新本家文書」の《鳩間口説》が原作に最も近い形を示しているものと考えられるから、「新本家文書」を中心にして考えを述べることにする。

《鳩間口説》の内容は、大城學氏が指摘したように、「祝儀物」としての性格と、口説囃子の「教訓物」としての性格が認められる。おそらく、程順則（1663-1728年）著『六諭衍義』の孝順父母、尊敬長上、和睦郷里、教訓子孫、各安生理、母作非為の徳目が、首里王府末端の役人、袖山筆者・新本仁屋の人生観に大きく影響したからであろう（安田和男『名護親方・程順則〈琉球いろは歌〉』ボーダー新書、2015年）。

以下、《鳩間口説》について、『鳩間島』収録の歌詞を（H）、「新本家文書」収録の歌詞を（A）と略記して示し、一連（音楽的な繰り返し、一連は口説の1フレーズと口説囃子によって構成されている）ごとに、（H）と（A）を比較検討し、《鳩間口説》の歴史的変遷の過程を考えることにする。

（1）第1連

（H）ぎにやゆたかぬ ばとうまむら しまぬながりゆ みわたしば

（実に豊かな鳩間村は 島の流れ（形状）を見渡すと）

（A）実や豊の鳩間村 島の流れを見渡せハ

（誠に豊かな鳩間村 島の流れを見渡すと）

（H）るくぬいちじに ちかくあり*1

（六の一に 近い（似ている））

（A）禄の一に字画あり*2

（禄の一に字画（漢字を構成する字画の意味）がある）

（H）イヤイーや うすめでい かるまきうらりてい*3 うやくちょーで

（囃子 国王様の公務に 勤務することができ 親子兄弟）

（A）いやいや 御主みへでい がらみちおらりて*4 親子兄弟

(囃子 〈弥弥〉 王府の公務に勤めておられて 親子兄弟)

(H) とうじっくわ やしなてい むらとうん わぶくに わらびとうしゆり
(妻子を 養って 村人とも 和睦に童から年寄りまで)

(A) 妻子 養て 村とん 和睦に*5 童子 年寄 (トショイ)
(妻子を養って村人とも 仲良く 〈和睦〉して 子供 〈童〉から年寄まで)

(H) くわんくわー うどうくぬ むじきな むぬさみ*6 んぞさ そーりば
(クワンクワー 〈未詳語〉男の 無邪気な者よ 可愛がれば)

(A) 鰥寡孤独 〈クワンコハクトコ〉の毛ちきな 毛のまで*7 無藏さ志うり王
(妻を失った男と夫を失った女、寄る辺ない独り者まで可愛がっているので)

(H) ていんぬみぐみぬ うやきはんじょー あらしみせゆさ
(天の恵みが 裕福繁昌を あらしめなさるよ)

(A) 天の艸 (ジュツ。恵) の おやき繁昌阿らしみ志へよさ
(天の憐み恵みである富貴繁昌をあらしめ 〈もたらして〉下さるよ)

(H) なまぬはやしに くどうきゆみゆみ サーッサ
(今の囃子に 口説を詠め詠め サーッサ)

(A) 無まの王や志に口説読々
(今の囃子に口説を歌えよ歌えよ)

第1連の歌詞の大きな違いは、(H)「るくぬいちじに ちかくあり」*1 (六の一に近い)とあるのに対し、(A)では「禄の一に字画あり」*2と認められることである。(H)は、「島の流れ」を島の外形として把握しているのに対し、(A)では「禄の一の持つ意味概念が島の形に込められている」と解釈している。

(H)「かるまきうらりてい」*3は、鳩間方言で、「束ねていることができて」の意味となる。(A)では「がらみちおらりて」*4とあり、『沖縄語辞典』によると、首里方言の「ガラミチュン」(奉仕する。勤める)の連用形であるから、文脈上「首里王府の役人として公務に勤務することができて」の意味を表したものである。

(A)「妻子養て 村とん和睦に」*5は、程順則の「和睦郷里、教訓子孫」の徳目を表現したものである。

(H)では未詳語とされた「くわんくわー うどうくぬむじきな むぬさみ」*6は、(A)では「鰥寡孤独の毛ちきな毛のまで」*7とある。鳩間島では、漢語の「鰥寡孤独」(鰥夫 〈ヤモオ〉、寡婦 〈ヤモメ〉、孤独 〈コドク〉、無食 〈ムジキ〉)が正確に伝承されなかつたことが分かる。

(2) 第2連

(H) はとうまなかむり ぱりぬぶり ゆむぬきしきゆ ながむりば

(鳩間中岡に 走って登り 四方の景色を 眺めると)

(A) 鳩間仲盛 走登り 四方の氣色を 詠毛りハ

(鳩間中岡 走登り 四方の毛色を 眺めると)

(H) いぬちながかる くばぬした

(長寿延命の蒲葵の下であるよ)

(A) 命ち無がかる 久葉の下

(命が長くなるような 蒲葵の下の眺めであるよ)

(H) イヤイーカー びとうぬみぬちや*8 さんあていならんさ ぬちぬありわどう

(囃子 人の命は 予知することができない 命があればこそ)

(A) いや々 人の身掬屋*9 さん阿て 無らんさ 命の阿リはど

(弥弥 いよいよ 人の命は計算して予知できないものだ 命があればこそ)

(H) ちむぬうむていん くくるぬあるていん じゅーじゅーさまざま かなでいいかりさ

(肝の 思いも 心の思いも いろいろ様々 叶っていくものだ)

(A) 肝のおもてん 心の阿るてん 種々様々 叶ていかりさ 右同

(肝 〈胸の内〉 の思いも 心の思いも 様々に叶えていけるものだ)

第2連の歌詞の相違点は、(H)の口説囃子「びとうぬみぬち」*8の部分に認められる。(A)では「人の身掬屋」*9と読めるが、くずし字の「掬」がはっきりしない。今のところ (H)に従っておく。

(3) 第3連

(H) あれに見ゆるはうむとうだき*10 やらぶたきどうん くばまだき くんぬやいだき
ばとうばなり

(彼方に見えるのは於茂登岳で 屋良部崎竹富島、小浜岳 〈大岳〉、古見の八重嶽 鳩離れ)

(A) ありに見よるハ おもと嵩 屋良部竹富 小濱嵩 古見の八重岳 鳩離り

(あちら 〈彼方〉 に見えるのは於茂登岳、屋良部竹富 小濱嵩 古見の八重嶽 鳩離り)

(H) イヤイーカー しまぬありさま うふちばなりぬ あぬたかぬたぬ たかさひくさや
(囃子 島の有様は 大西表島の 彼方此方の 高さ低さは)

(A) いや々 島の在り様 大地離りぬ彼方此方 アナタコナタ の高さ卑くさ屋

(弥弥 いよいよ 島の在り様 大地離れ 〈大西表島〉 のあちらこちらの高さ低さは)

(H) とうなみならんさ しじくわしまに すだていんちゃりば*11 しんとう たぬまし
むぬさみ

(均すことはできない 非常に我が島に 育ってみれば 本当に 頼もししいものよ)

(A) 続並無らんさ 続くわ嶋の素立ち むちや連ハ*12 徒んと 堂のまし毛のさめ 右同

(均すことはできないよ 続く我が島の育ち (地形) を見ると、誠に楽しいものだ)

第3連の口説囃子で、(A)「続くわ嶋の素立ちむちや連ハ」*12は、(H)では「しじくわしまにすだていんちゃりば」*10と変化していて、「しじく」が副詞に変化している。おそらく鳩間方言のスズーコ（非常に、ひどく）が転訛したものであろう。

しかし、「しじく」は「わしまに」を連体修飾しているので、副詞に解釈されない。「あれに見ゆるはうむとうだき」*10に始まる遠景描写から近景描写へと移り、「続くわ嶋」へと展開する歌詞だから、(A)の表記が正確で、「遠景描写の後に近景の鳩間島の美しい景色の素立（成立）を考えると」と展開するのが歌詞全体の本来の姿だと考えられる。(H)の表記は、鳩間方言からの干渉による変化と推定される。

(4) 第4連

(H) まえにみゆるは びないさーら*13 うみにながゆる たつかわや*14 ゆゆもかわらぬ うむしるよ

(前方に見えるのは ピナイ滝で 海に流れる立川（滝。ピナイ滝のこと）は代々変わらず 面白いことよ)

(A) 真南風に見よるハ鬚川 ヒナイ さら*15 海に流る瀧田川 タツカハ ハ*16 代々に替わらん面白や。

(真南に見えるのはピナイ滝（髭川滝） 海に流れる瀧田川は代々に（万代）変わらず面白い（趣がある）。)

(H) イヤイーカー うみとうやまとうや うなじくむぬさみ

(弥弥 海と山とは同じものであるよ)

(A) 弥弥 うみとうやまとうや おなじく毛のさめ*17

(弥弥 海と山とは同じものというべきものだ)

(H) たとうていんちゃりば とうじとうぶとうとうや ひとつどうやんていさ

(例えてみれば 妻と夫とは 一つであるという)

(A) 縱令（タトヒ）てむちやりハ 妻と夫とハひとつと屋んてさ

(例えてみると妻と夫は 一つであるという)

(H) りくぬはなしむ かわりんかわりば*18 うやきはんじょー あらしみせゆさ

(禄の話が 変わり変わっても 裕福繁昌を あらしめなさるよ)

(A) 俗の嘶の 川り向りは おやき繁昌 阿ること屋んてさ*19 右同

(世間（世の中）の嘶（ハナシ）が変わっていくと 富貴繁盛があるということだ)

第4連の歌詞(H)「まえにみゆるはびないさーら」*13と(A)「真南風に見よるハ鬚川 ヒナ

イさら」*15、(H)「うみにながゆる たつかわや」*14と(A)「海に流る瀧田川 タツカハハ」*16から、榎山仮筆者・新本仁屋の漢文、和文、琉文に通じる素養の高さが推察される。(A)「弥弥 うみとうやまとうや おなじく毛のさめ」*17からは、『六諭衍義』の「各安生理」の徳目がうかがえる。

(H)「りくぬはなしぬ かわりんかわりば」*18(禄の話が変わり変わっても～)は、(A)では「俗の嘶の 川り向りは おやき繁昌 阿ること屋にてさ」*19とある。『沖縄語辞典』に「ジュク」は「俗、風俗、土地のならわし」とあるから、「俗の嘶」は「俗世間の評価(嘶)」の意味と解される。つまり、王府の公務に勤めて、『六諭衍義』の徳目を積み、「俗世間の評価が高くなつて立身出世し、繁昌する」の意味と解されるのである。

(5) 第5連

(H) まくとうしきしみ ばとうまむら ういむわかきむ びとくくる しじくはんじょー
ぬ なうまさる

(真実 聞こえる 鳩間村は 老いも 若きも 心を一つにして 非常に繁昌が なおも
優っている)

(A) 誠とききし見 鳩間村 老も若も 一心 続く繁昌の 猶 勝る*20

(誠の村と有名な鳩間村は老いも若きも心を一つに合わせて 続く繁昌は更に良い)

(H) イヤイーアー かみぬくくるに たむきあるらば*21 みぐりみぐりぬ
(イヤイーアー〈囃子〉 神の心に恵があれば 巡り巡りの)

(A) いや々 神乃心に手向 (タムキ) 阿る礼ハ*22 回 (メコ) り々ての
(弥弥 神の心に手向け(恵み)が有るので、巡りめぐっての)

(H) なしごわうみんぐわ んまりんまりてい あとうゆんさきゆん てーらんむぬさみ
(産し子や生み子が 生まれ生まれて 後にも先にも 絶えないものである)

(A) 無し子 思子屋 生り々て 後世ん先にん絶らん毛のさめ
(思い子が生まれ続いて 後世にも 先の世にも絶えないものだ)

(H) あたるうやふじ らくゆみせゆさ
(当たる祖父母は 楽をなさるよ)

(A) 當る親祖 らくを めしへよさ
(当たる親や祖父母は 楽をなさることだ)

第5連の(A)「誠とききし見 鳩間村 老も若も 一心 続く繁昌の 猶 勝る」*20の「続く繁昌」の部分は、(H)では「非常に繁昌」となつていて文脈が繋がらない。「しじく」は「続く」と解すべきである。

口説囃子の部分に(H)「かみぬくくるに たむきあるらば」*21と仮定表現になっているが、(A)では「神乃心に手向 (タムキ) 阿る礼ハ」*22と確定表現になっており、これが文法的にも正確な表現と認められる。

第5連には、全体的に『六諭衍義』の「尊敬長上」、「孝順父母」、「教訓子孫」、「各安生理」、「母作非為」の徳目と通う思想も認められる。

(6) 第6連

(H) いにやしさくぬ ゆかでいさみ*23 しぐわちぐぐわちぬ なりぬれや

(稻の植え付けは一升ます幅に植えるのがよい 4月5月習慣は)

(A) 稻や諸作の よかてさめ*24 四月五月の奈りのりハ*25

(稻は農作業（仕事、生業）が良かったからだ 4月5月になったらば)

(H) へいやーへいやーとう かりうさみ

(ハイヤー ハイヤー（掛け声）と 割り納めよ)

(A) 屋いや々と 割収も*26

(エイヤー エイヤーと割り納める)

(H) イヤイーカー ゆたかなるゆぬ しるしさみえー

((囁子) 豊かなる世の兆候は)

(A) ゆたかなるゆぬ しるしさめやい*27

(実り豊かな世の兆候というものだよ)

(H) あみや とうかぐし かじや しじかに しくりむじくい まんさく そ一りば*28

(雨は十日越しに降り 風は静かに吹き 作った農作物が満作になれば)

(A) 雨屋十日越 風や静かに 作る物作り満作志うりハ

(雨は十日越しに降り 風は静かに吹き 作る農作物が満作している（豊作である）から)

(H) いひんかたとうき ゆだんやならんさ きんとうきぱりよ にせたー うむしるむぬ
さみ

(ほんの片時も油断はできない しっかり頑張れよ、二歳たちよ 面白いものであるよ)

(A) いひん片時油断や無らんさ 急度 気張ハニ才達 面白毛のさめ 右同

(一時も片時も油断はできないよ しっかり気張れよ若者（二才）達よ 楽しいことだ)

第6連の(H)「いにやしさくぬ ゆかでいさみ」*23（稻の植え付けは一升耕の幅に植えるがよい）は、(A)では「稻や諸作のよかてさめ」*24と表記されている。「諸作」は農作業の意味で、鳩間方言のッサークは、その転訛したものである。このとき「諸作」は、水田耕作のアローナ、マトーナ、サントウ、ユントウのことを指している。「さめ」は終助詞で、意味は「～なんだぞ。～なんだよ」である。「一升耕の幅」とは書かれていない。これは、鳩間島で伝承されていく間に、島人たちの自由な解釈が付加されてきた姿を示している。本義は、「～ゆかでいさみ」の終助詞「さみ」（～なんだよ）で強調されている通り、「農耕に手を抜かないからだ」を表現したところにあるのである。

このように水田耕作に励むから、(A)「四月五月の奈りのりハ」*25（4月5月になると）、

「屋いや々と 割収も」 *26 (ヤイヤヤイと掛け声をかけて収穫をする) ことができる。これが(A)「ゆたかなるゆぬ しるしさめやい」 *27 (豊かなる世〈豊年の〉兆候というものだ)と断言しているのである。これは『六諭衍義』の徳目「各安生理」、「教訓子孫」を表したものと考えられる。

また、(H)「まんさく そ一りば」 *28は確定表現であるので、「満作になれば」という仮定表現的な訳は相応しくない。この部分に相当する(A)のように、ここは「満作している〈豊作である〉から」と訳さなければならない。

(7) 第7連

(H) ぱとうまばいばた かゆふにぬ かぎりかざらん くるりくる いにやましんじ く
ぎわたし

(鳩間島と南端〈西表島〉を通う舟が 絶え間なく 往き来する 稲を満載して 滞ぎ
渡している)

(A) 鳩間南風端 通ひ船の限り々らん くるりくる 稲や徒んつき滯ぎわたる
(鳩間南風端〈西表島〉を通う舟が限り〈絶え間〉なく行き来する)

(H) イヤイーヤー きぱりきぱりよ でいきゆるふどうさみ*29

(囃子 頑張れ頑張れよできるほどに)

(A) いや々 気張々ハ 出来よる物さめ*30
(弥弥 気張れば頑張るほど できるものだ〈成果は上がるものだ〉)

(H) いにやまんさく や一ぬかじかじ ゆかぬありさま しんとう みちくみ
(稲は満作 家ごとに 床の有様は いっぱい稲が満ちこみ)

(A) 稲や満作 家の数々 床の阿リ様 徒んと満く見
(稲は豊作で 家ごとに 床の有様は 床いっぱい稲が満ちて〈積みこまれて〉)

(H) ゆかや ほんぽん いりりば ちよんちよん ぶりゆる ふどうさみ

(床はポンポン〈擬音語〉と鳴り 入れるとチョンチョンと鳴り 折れるほどである)

(A) 床や不ふん々 入りハち由うん々 折れよるふどさめ 右同
(床はフフン々 〈稲を〉入れるとチユン々 折れるほどだ)

第7連は、鳩間南風端間を、稲を満載した舟が絶え間なく往来するユートピアが描写されている。

(H) 「きぱりきぱりよ でいきゆるほどに」の一文は、「きぱりきぱりよ」(頑張れ頑張れよ)〈動詞「頑張る」の命令形〉 + 「でいきゆるふどうさみ」(できる程度)〈「程度」を表す副詞〉という倒置的な構成になっている。そうすると、「できる程度に頑張れよ」と訳せるが、これは『六諭衍義』の徳目「各安生理」、「教訓子孫」に反している。

ここは、むしろ(A)「気張々ハ 出来よる物さめ」 *30の方が相応しく、「気張々バ」(「気張り気張る」の条件形) + 「出来よる物さめ」(出来的物だ)と考えると、「気張れば」(条件)

→ 「良い成果が上がるものだ」(結果) という、第7連で描かれた豊穣の世界とも一致する。

(8) 第8連

(H) きみぬみぶきん たれあまり かみんふとうきん うはちあぎ すぬぬあまりやいただけり*31

(君主の御恩義も十分に賜り 神にも仏にも御初をあげ(献饌し) 収納の余りは頂きます)

(A) 君の貢きん 只納めて 神む仏む 御初上げ 其之除りや頂きり*32

(君主への貢納も何事もなく納めて 神にも仏にも御初を上げ 其れの餘は頂いた)

(H) イヤイーヤー にんぐじょーの ゆりゆとう うさみてい かみんふとうきん

(囃子 年貢上納は 余裕をもって 納めて 神にも仏にも)

(A) いや々 年貢上納 緩ふ納めて

(弥弥 年貢上納は ゆるりと納めて)

(H) うはちん あぎゆり あまりぬくりや うさきん うみきん しくりまらしょーり

(お初をあげて(献饌して) 余り残りは 酒 神酒を醸造してください)

(A) 除り残りや御酒 御神酒ん作り まら志出て

(余り残りは お酒やお神酒に醸造して)

(H) みちぬ しまたに ていさじめーうき うどういきよーぎん うむしるむぬさみ

(道のちまた(辻)に手巾(手拭) 鉢巻を締めて 躍り狂言をするのは 面白いものであるよ)

(A) 道乃縁陰? (ハク。十字路、巷)に手巾(ティサジ) 前結 躍り(不明) 面白毛のさ見

(道の巷に 手拭を頭の前に握り締めて 躍り歩けば 楽しいものだ)

第8連は、冒頭の口説部分が(H)「きみぬみぶきん たれあまり かみんふとうきん うはちあぎ すぬぬあまりやいただけり」*31であるのに対して、(A)では「君の貢きん 只納めて 神む仏む 御初上げ 其之除りや頂きり」*32である。

口説囃子では、(A)「年貢上納 緩ふ納めて」、「除り残りや御酒 御神酒ん作り まら志出」、「道乃縁陰? (ハク。十字路、巷)に手巾(ティサジ) 前結 躍り(不明) 面白毛のさ見」と続く。

(H)では「君主の恩義も十分に賜り」が示すように、国民に対する君主の御恩が表現の中心であるが、(A)では封建時代の君主に対する臣下の義務をうたったのが表現の中心である。

(9) 第9連

(H) ゆるやひるやとう さかむれに うたやさみしん とうんじたてい しまぬぬじゅぬ

じゃ たていあしば

(夜や昼やといって 酒盛りに 歌や三味線が 飛び出して 島の隅々に立って遊ぼう)

(A) 夜や昼やと酒盛りに 歌や三味せん とんち立手 道之能座々 立阿春ぶ*33

(夜も昼も酒盛りをして 歌や三味線に飛び立って 道の〈に〉芸を立てて 〈芸をして〉遊ぶ)

(H) イヤイーヤー むかしみるくぬしるしさみえー*34 うてーもーてー すでいをすら
にてい うむしるむぬさみ*35

(囃子 昔弥勒(世)の兆候であるよ 歌って踊って 袖を連ねて 面白いものであるよ)

(A) いや々 むかし弥勒の廻てさめ屋い*36 おたい 舞たい袖を徒らにて 面白ものさめ

(弥弥 昔の弥勒世が廻ってきてですよ 歌ったり舞ったり衣裳の袖を並べて楽しいものだ)

(H) なまぬひきばや うたゆかわしば サーッサ

(今の引羽や、歌を交わせば サーッサ)

(A) 今の引きバや歌よか王しバ

(今の引羽は歌を交わせよ)

第9連冒頭の口説部分は、(A)「夜や昼やと酒盛りに 歌や三味せん とんち立手 道之能座々 立阿春ぶ」*33とある。(H)では、単語「能座」の意味を誤解して「ぬじゅぬじゅ」(隅々に)と解釈しているが、それでは歌意が通らない。「能座」の語義は「芸能」である(『沖縄語辞典』)。したがって、第9連の本歌部は「夜も昼も酒盛りをして、歌や三味線が道に飛び出し、歌舞芸能を仕立てて遊ぶ」の意味となる。沖縄本島で見られる「ミチズネー」のような芸態である。琉球古語「能座」の意味が、鳩間島では正しく理解されていないことが分かる。

第9連の口説囃子は、(A)では「いや々 むかし弥勒の廻てさめ屋い」*36とあるが、(H)では「イヤイーヤー むかしみるくぬしるしさみえー」*34とうたわれている。(A)では、人間社会のあるべき姿、努力の結果としてのユートピアである「昔弥勒の世」が廻ってきたと解釈されている。これに対して(H)の「むかしみるくぬしるしさみえー」*34は、単に「うてーもーてー すでいをすらにてい うむしるむぬさみ」*35という実態を指している。

ただ、ここで注目しておくべきことは、第9連で表出された芸態である。これは沖縄本島の各地集落で見られる「長者の大主」を中心とする「ミチズネー」の芸態を彷彿させるからである。これらの能座(芸能)には「入子型」芸能が仕込まれているように観察される。鳩間島の豊年祭には東村、西村対抗のゾーラキ(「常楽我淨」(常住不变、苦しみなく樂であること)の転訛か)が演じられるが、西村のゾーラキから東村のゾーラキへと演技が展開する際に、高らかに吹奏される笛の曲をイリクヌティーという。

これはお盆のアンガマ踊りが終了して次の家へ移動する際に吹奏される。この曲が吹奏されると、演技が完了したことを表すのである。イリクヌティーの「イリク」の義は、「入子」であり、「ティー」の義は「笛」である。これは沖縄本島から移入された語彙である。

古代日本語のハ行音はP音であったことが定説である。「笛」の鳩間方言は「ピラキ」であ

るが、それは「笛竹」からの転訛である。したがってイリクヌティーは、あるまとまった演目が終了したことを表す記号の笛の音を意味し、時枝文法でいう日本語の「入子型文構造」と同じと解釈される。

時枝は、語を「詞」（概念過程を経た表現）と「辞」（概念過程を経ない、話し手の立場の直接表現）に大別し、「辞」は常に「詞」の下について具体的表現となるとし、この詞辞の結合したものを「句（文）」と定義した。つまり、「詞」+「辞」=「文」となる。そして、それがさらに大きな「詞」となり、それに「辞」が付いて大きな「文」となり、文章へと展開する文構造を「入子型文構造」と定義した。

したがって、西村のミルク踊りをはじめとする諸々の芸能が集まつたのが一つの文構造に比定されるのであり、東村のカムラーマ踊りをはじめとする諸々の芸能がもう一つの文構造に比定されるのである。

故に、一文（西村の入子型芸能）が完了するとイリクヌティー（入れ子の笛）が吹奏され、次の文へと展開されると解釈されるのである。

こう解釈すると、158年前に筆写された「新本家文書」の《鳩間口説》は、芸能史研究上の貴重な資料になるといえる。

さらに、「新本家文書」には《鳩間節》も認められるから、158年前に《鳩間節》は成立していたことになる。鳩間真吉氏によると、「鳩間節の原歌は、仲底真那主と、上原日差から離縁された姉と二人、稻を満載したサバニで島へ帰る道すがら即興的に歌われたもの」というから、仲底家の除籍簿を調査すれば、《鳩間節》の原歌《鳩間中岡》の原作者を特定できる可能性がある。

付記

『六論衍義』を著した程順則（名護親方）は、1661年那霸の久米村で生まれた。21歳の時に私費で中国へ留学し、『六論衍義』に会う。1708年、第4回目の渡中の時に、福州柔遠駅の琉球使館内で、巨額の私財を投じて復刻製版し印刷して持ち帰った。

『六論衍義』は、明の洪武帝21年（1388）に、民衆教育の目的で宣布した『教民榜文』の41力条中の自治章程の一条で、次のように構成されている。また、各項目の内容を琉歌で表しているところに特色がある（安田和男『名護親方・程順則（琉球いろは歌）』ボーダー新書、2015年）。

「孝順父母」（父母に孝順なれ）、意見寄言や 身の上のたから 耳の根ゆ聞きて 肝に留みり
「尊敬長上」（長上を尊敬せよ）、知能才ある人や 世の中の手本 朝夕務みとて 沙汰よ残す
「和睦郷里」（郷里は和睦せよ）、我身に疵あらば 我身の疵なおし 人の疵誹して 益やね
さみ

「教訓子孫」（子孫を教訓せよ）、下手からど習て 勝れいんすゆる 及ばらぬと思て 思案
するな

「各安生理」（おののおのせいりにやすんぜよ）、楽に育つしや 苦りさする基 物よ思み詰み
て 浮き世渡り

「母作非為」（ひいをなすなけれ）、隠ち隠さりみ 人の過ちぬ 急じ改みて 我肝磨け

竹富町史編集係の動向

4月15日 中野わいわいホールで「西表石垣国立公園拡張及びイリオモテヤマネコの日制定記念フォーラム」が開催された。

口ポットカメラで捉えたイリオモテヤマネコの貴重な映像や開発の秘話などの講演や、専門家によるトークセッション、歌手の坂本美雨さんらのヤマネコ応援歌やダンスなどが披露された。



5月20日 「沖縄県地域史協議会 2016年度総会および第1回研修会」に職員2名参加。

浦添ようどれ巡見の後、会場を浦添市男女共同参画推進ハーモニーセンターに移して、講演会や報告会が行われた。県内各市町村から地域史担当者が集まった懇親会では編集業務の現状や今後の課題など、多くの貴重な意見を聞くことができた。



6月12日 「第31回竹富町球技大会」が開催された。大原中学校をメイン会場にして各島や集落で結成されたチームがソフトボール、ソフトバレーボール、グラウンドゴルフの3種目で汗を流した。

結果は、ソフトボール優勝=小浜チーム、ソフトバレーボール優勝=住吉チーム、グラウンドゴルフ優勝=浦内チーム、総合優勝=住吉チーム。



8月16日 旧盆の中の日に、波照間島のムシヤーマが行なわれ、神仏への豊作豊漁祈願と先祖供養がなされた。弥勒様が引き連れた踊りや太鼓、棒の演武や獅子舞などの大仮装行列が通りを練り歩いて午前の部（狂言）を終えた。午後の部は舞台での舞踊やコンギで会場を沸かせた。



9月3日 「2016年度県総合防災訓練」が西表島大原港で実施された。自衛隊や海上保安庁、警察に消防団も加わった大掛かりな訓練は竹富町で初めて。

訓練は八重山諸島南西沖を震源とする震度6の地震と津波が到達するという設定で、本番さながらに救援救助活動が行なわれた。



10月2日 「第19回竹富町民運動会」が大原中学校で開かれ各島、各集落から多数の町民が集まり、綱引き、リレー、縄ない競争など様々な種目でさわやかな汗を流した。結果は次のとおり。

優勝=上原・鳩間チーム、準優勝=黒島チーム、3位=大富・古見・美原チーム。



10月9日 黒島東筋集落の結願祭が開催された。黒島では原則的に旧暦8、9月の吉日を選んで結願祭が執り行われる。例年は比江地御嶽で行われるが、今年は事情により、会場を伝統芸能館に移して行われた。結願祭の奉納芸能は儀礼的な狂言「初番」でもって始まるのが定番である。

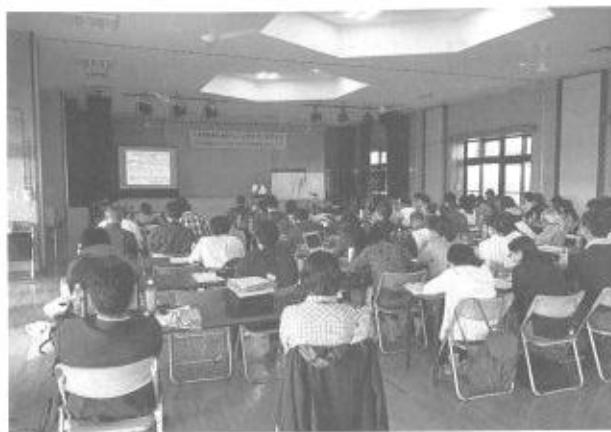


11月14日 小浜島の結願祭。一年間の諸祈願の成就を神に感謝し、向こう一年の豊穣を予祝する祭祀である。小浜島で結願祭のことを「シチイントウ」(節事)ともいうのは、節祭と合祀したことによると伝えられる。正日には嘉保根御嶽の神庭で北・南両部落から数々の芸能が奉納される。躍番組をみると、北部落は「メラク」(弥勒)、南部落は「フクルクジュ」(福禄寿)から始まることになっている。



11月25日 沖縄県地域史協議会の第2回研修会が名護市屋我地で開催された。

羽地地域と愛楽園の巡見のあと、講演と報告会が行なわれた。今回は竹富町史編集委員でもある琉球大学教授の里井洋一先生の「羽地地域の地方役人について」と題した講演もあり充実した研修会となった。



12月5日 小浜島の種子取祭は稻の播種儀礼で、各御嶽でヤマニンジュ（御嶽の祭祀集団）によって、アヨーがうたわれ、稻のつつがない生長を祈願する。写真は嘉保根御嶽での祭儀。また、今年は佐久伊御嶽のヤマニンジュの有志がムラマーリを復活させ、深夜に道唄《ファムレーウタ》を堪能できた。翌日は「農事懇談会」と称し、ミルクヤー（北部落）・フクルクジユヤー（南部落）で豊穣予祝の祭儀が行われた。



月 日	内 容
4月1日	竹富町年度初め式
4月7日	『竹富町史だより』(37号)を各戸に配布
4月27日	黒島編原稿締め切り
5月28日	竹富町婦人連合会 基調講演 飯田泰彦「竹富町の民俗芸能」
6月5日	第13回 鳩間島編専門部会を開催
6月21日	沖縄県史資料編集班 新聞資料調査
7月1日	第15回 波照間島編専門部会を開催
7月11日	上里 至副町長が退任
7月14日	鳩間島シンポジウムの講師依頼 (竹教委総第214号)
7月15日	波照間島編原稿締め切り
7月28日	黒島精耕「論壇 鉄田義司日記が語るもの」が『八重山毎日新聞』に掲載
8月1日	「2017年度竹富町史編集事業計画」提出についてのお願い (竹教委総233号) 通知
8月28日	竹富町長選挙
9月9日	石垣在鳩間郷友会にシンポジウムの余興「舞踊提供のお願い」(竹教委総第297号)依頼
9月13日	川満栄長町長退任式
9月13日	石垣久雄「誘い 鳩間島の過去・現在・未来を語ろう!」が『八重山日報』に掲載
9月14日	第20代竹富町長に西大舛高旬氏が就任
9月16日	台風16号の接近にともない鳩間島シンポジウムが延期となる
9月18日	鳩間島シンポジウム延期の知らせを『八重山毎日新聞』『八重山日報』で周知
9月20日	『竹富町史だより』(38号)を発刊 町内各戸に配布
9月27日	台風17号のため業務停止
10月3日	第18代竹富町副町長に前鹿川健一氏が就任
11月11日	竹富町史編集委員 玻座真 武氏 没 (13日サンレー紫雲閣にて告別式)
11月25日	黒島編臨時ミーティング(鳩間真英、當山善堂、玉代勢泰興、西表隆夫、宮良和子、前石野教育委員会課長)
12月2日	第34回 竹富町史編集委員会を開催 (於:竹富町役場2F委員会室)
12月12日	西表島編原稿締め切り
12月27日	第16回 波照間島編専門部会を開催
1月10日	黒島編執筆者有志による臨時ミーティング
1月29日	シンポジウム「鳩間島の過去・現在・未来を語ろう」(於:市民会館中ホール)

第34回竹富町史編集委員会開催

第34回竹富町史編集委員会が、2016年12月2日（金）竹富町役場2階委員会室で開催された。日程は次のとおり。

◎竹富町史編集委員 委嘱状交付式

◎竹富町史編集委員会

議題（1）竹富町史第七巻「波照間島」の報告

（2）各専門部会の進捗状況

①前近代編について（里井）

②自然編について（新本、花井）

（3）2017年度の編集事業計画

（4）鳩間島シンポジウムについて

町史編集委員会に先立って編集委員の任期満了に伴う委嘱状交付式が執り行われた。任期は平成30年12月1日までとなっている。

委嘱された委員は次の18名。

◎石垣 久雄 (石垣市文化協会会长)

○里井 洋一 (琉球大学教授)

新本 光孝 (琉球大学名誉教授)

石垣 金星 (西表をほりおこす会会长)

☆西表 隆夫 (元黒島郷友会会长)

上江洲儀正 (南山舎株式会社代表取締役社長)

大城 肇 (琉球大学学長)

大浜 修 (新城民俗芸能保存会会长)

黒島 精耕 (元竹富町教育委員会教育長)

玉城 功一 (元八重山商工高校教諭)

通事 孝作 (元竹富町史編集係係長)

西里 喜行 (琉球大学名誉教授)

鳩間 真英 (元黒島小中学校校長)

花井 正光 (元琉球大学教授)

本田 昭正 (元那覇高校教諭)

三木 健 (前琉球新報副社長)

吉川 安一 (公立大学法人名桜大学名誉教授)

(◎は委員長、○は副委員長、☆は新委員)

編集委員長には石垣久雄氏、副委員長には里井洋一氏がそれぞれ留任された。



はじめに大田綾子教育長から「島じまの歴史、行事、民俗芸能を竹富町史の中に記録として残し、後世に受け継いでいくことは我々に課せられた大きな課題であり、責務だと思っております。2年間という長丁場ですが健康に留意なされ竹富町史編集事業に御協力いただきますよう、よろしくお願ひいたします」。との挨拶があった。

第34回竹富町史編集委員会開催にあたり、長年にわたって町史編集委員としてご尽力され、去る11月に亡くなられた玻座真 武氏へ黙祷が捧げられた。なお、玻座真委員の後任として西表隆夫氏が委員に加わったことが報告された。

議題（1） 竹富町史第七巻「波照間島」の報告（玉城功一）

今年度に発刊予定の島じま編「波照間島」の校正作業を進めている。今後、戦争マラリアの記述、古謡の楽譜を挿入したい。また「終章」をもっと充実させたい。

議題（2）-① 前近代編について（里井洋一）

前近代編の専門部会を開いて西表島で発見された新城家文書（蔡林家譜）と宮良用庸家文書を中心に編集事業計画とあわせて検討していきたい。

議題（2）-② 自然編について（新本光孝・花井正光）

自然編は自然環境編と自然写真編の2部に分けて刊行する。西表島をはじめとして竹富町の島々を網羅した形にしていきたい。その中で自然災害史も盛り込んで行こうと考えている。

議題（3） 2017年度の編集事業計画

年度	書名	備考
2016年度	竹富町史 第七巻 波照間島	
2017年度	竹富町史 第八巻 西表島（近代開拓）	
2018年度	竹富町史 第八巻 西表島（歴史・民俗）	
2019年度	竹富町史 第四巻 黒島	
2020年度	新聞集成VII	
2021年度	前近代編	
2022年度	自然編	
2023年度	郷友会編	
2024年度	言語編	

議題（4） 鳩間島シンポジウムについて

第33回竹富町史編集委員会で、既刊書の活用についての議論を踏まえ、同シンポジウムは竹富町史島じま編シンポジウム「鳩間島の過去・現在・未来を語ろう！」の開催が決定された。台風16号の影響で延期となったが、2017年1月29日に石垣市民会館中ホールで開催されることになった。編集委員のみなさまも宣伝をお願いしたい。

2016年度受贈図書一覧

多数の個人、関係機関等からの御寄贈、誠にありがとうございます。

受贈図書（発行年、編著者）	寄贈者芳名
ARCHIVES 一沖縄県公文書館だより— (第50号) (2016年、沖縄県公文書館文化振興会公文書管理課)	沖縄県公文書館文化振興会公文書館指定管理者
ARCHIVES 一沖縄県公文書館だより— (第51号) (2016年、沖縄県公文書館文化振興会公文書管理課)	沖縄県公文書館文化振興会公文書館指定管理者
綾道 戦争遺跡編 (宮古島市教育委員会、2016年)	宮古島市教育委員会
綾道 平良北コース (宮古島市教育委員会、2014年)	宮古島市教育委員会
綾道 下地・来間コース (宮古島市教育委員会、2014年)	宮古島市教育委員会
綾道 宮国・新里コース (宮古島市教育委員会、2015年)	宮古島市教育委員会
『伊計村遊草』漢詩書道展 蔡大鼎 (伊計親雲上) が見たうるまの風景 (2016年、うるま市教育委員会)	うるま市教育委員会
石垣市叢書22 参遺状 喜舎場永珣旧蔵史料(2016、石垣市教育委員会市史編集課)	石垣市教育委員会市史編集課
うるま漢詩ロード散策 No.1 (2013年、うるま市立中央図書館)	うるま市立中央図書館
うるま漢詩ロード散策 No.2 (2013年、うるま市立中央図書館)	うるま市立中央図書館
うるま漢詩ロード散策 No.3 (2014年、うるま市立中央図書館)	うるま市立中央図書館
うるま漢詩ロード散策 No.4 (2014年、うるま市立中央図書館)	うるま市立中央図書館
うるま漢詩ロード散策 No.5 (2015年、うるま市立中央図書館)	うるま市立中央図書館
大城志津子図案集 (1991年、沖縄県立博物館編)	飯田泰彦
大竹蓉子短歌誌 花調八重山 (第3集植物編) (2016年、大竹蓉子)	大竹蓉子
大森一也作品展 祈りの島々 八重山(2016年、本橋正義、小須田望、櫻井由理編)	大森一也
沖縄県公文書館研究紀要 (第18号) (2016年、沖縄県公文書館文化振興会公文書館指定管理者)	沖縄県公文書館文化振興会公文書館指定管理者
沖縄県公文書館20年のあゆみ (2016年、沖縄県公文書館文化振興会公文書館指定管理者)	沖縄県公文書館文化振興会公文書館指定管理者
沖縄県史 各論編8 女性史 (2016年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
沖縄県史だより (第25号) (2016年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
沖縄史料編集紀要 (第39号) (2016年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
沖縄県地域史協議会会誌 第39号 (2016年、沖縄県地域史協議会)	沖縄県地域史協議会

沖縄の戦時船舶と尖閣列島戦時遭難事件（2016年、八重山平和祈念館）	八重山平和記念館
沖縄の葉草と民間療法（1975年、仲本信幸）	波照間肇
沖縄県平和祈念資料館だより No030（2016年、沖縄県平和祈念資料館）	沖縄県平和祈念資料館
沖縄県平和祈念資料館だより No031（2016年、沖縄県平和祈念資料館）	沖縄県平和祈念資料館
沖縄県平和祈念資料館年報 第16号（2016年、沖縄県平和祈念資料館）	沖縄県平和祈念資料館
沖縄法政研究所所報（第25号）（2016年、沖縄国際大学総合研究機構沖縄法政研究所）	沖縄国際大学総合研究機構沖縄法政研究所
沖縄法政研究所共同研究調査報告書（第1号）（2016年、沖縄国際大学総合研究機構沖縄法政研究所）	沖縄国際大学総合研究機構沖縄法政研究所
恩納村誌編さん室だより 平成27年度（第42号－第47号）（2016年、恩納村誌編さん室）	恩納村誌編さん室
海外調査報告書 ブラジル・ボリビア（2016年、恩納村誌編さん室）	恩納村誌編さん室
勝連間切南風原村文書（Ⅱ）—うるま市文化財調査報告書第26集 翻刻報告書一（2016年、うるま市教育委員会）	うるま市教育委員会
勝連間切南風原村文書（Ⅲ）—うるま市文化財調査報告書第26集 翻刻報告書一（2016年、うるま市教育委員会）	うるま市教育委員会
韓国調査報告書—地域研究シリーズ No40—（2014年、沖縄国際大学南島文化研究所）	飯田泰彦
鎌倉芳太郎資料集—ノート篇 第Ⅲ巻—歴史・文学（2015年、沖縄県立芸術大学附属研究所）	沖縄県立芸術大学附属研究所
鎌倉芳太郎資料集（ノート篇）第四巻 雜纂編（2016年、沖縄県立芸術大学付属研究所）	沖縄県立芸術大学附属研究所
キャンパスの記憶—湘南キャンパスの歴史—（2016年、学校法人東海大学学園史資料センター）	学校法人東海大学学園史資料センター
具志頭村史 第六巻 近代新聞資料 上巻（2015年、八重瀬町史編集委員会）	八重瀬町史編集委員会
具志頭村史 第六巻 近代新聞資料 下巻（2015年、八重瀬町史編集委員会）	八重瀬町史編集委員会
気仙沼市における無形民俗文化財の調査記録（Ⅰ）〔地域構想研究教育報告No.4〕（2013年、相澤卓郎・斎藤良治・土取俊輝・梅屋潔）	梅屋潔
気仙沼市における無形民俗文化財の調査記録（Ⅱ）〔地域構想研究教育報告No.6〕（2015年、相澤卓郎・斎藤良治・土取俊輝・梅屋潔）	梅屋潔
口承文芸の様態とその観念—菅江真澄の「古神社縁起」を導入に代えて—〔『口承文芸研究』（第39号）（日本口承文芸学会）抜刷〕（2016年、星野岳義）	玉盛志乃
国指定史跡 富貴寺境内保存管理計画書（2016年、豊後高田市教育委員会）	豊後高田市教育委員会
坂上田村麻呂に関する伝承—菅江真澄の採集を素材にして—〔『早稲田大学大学院社会科学研究科 ソシオサイエンス』（vol. 20）〕（2014年、星野岳義）	玉盛志乃
しまたてい（No.77）（2016年、一般社団法人しまたてい協会編）	安里英子
写真集 南風原（2016年、南風原町史編集委員会）	南風原町史編集委員会

謝花昇生誕150年記念特別展 奸謀の餌となる勿れ 一謝花昇 沖縄民権運動の先駆者と明治沖縄— (2016年、八重瀬町教育委員会)	八重瀬町教育委員会
首里城研究〈No.18〉 (2016年、首里城研究会編)	首里城公園友の会
首里城公園に関する調査研究・普及啓発事業年報 第6号 (2016年、一般財団法人沖縄美ら島財団)	一般財団法人沖縄美ら島財団
人口学への招待 (2007年、河野稠果)	通事孝作
生活と自治〈No.567〉 (2016年、「生活と自治」編集委員会)	加田斎
砂川哲雄個人誌 とうもーる 〈第4号〉 (2016年、砂川哲雄編)	砂川哲雄
戦後の与那原 (2016年、与那原町史編集委員会)	与那原町史編集委員会
戦時関係略年表 (1931~1945年) (石垣市史編集室、発行年不明) × 3冊	石垣市史編集課
竹婦連研修大会 第22回〈パンフレット〉 (2016年、竹富町婦人連合会)	竹富町婦人連合会
中琉歴史関係檔案 道光朝 〈三〉 〈四〉 〈五〉 (中国第一歴史檔案館編)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
東海大学資料叢書4 電波科学専門学校開設認可申請書類 (2015年、学校法人東海大学望星学塾学園史資料センター)	学校法人東海大学望星学塾学園史資料センター
東海大学資料叢書5 旧制東海大学設立認可申請書類(上) (2016年、学校法人東海大学望星学塾学園史資料センター)	学校法人東海大学望星学塾学園史資料センター
秋のしずく 一敗戦70年といま— (2016年、高知新聞社編集局編)	高知新聞社、真崎裕史
南島文化研究所所報 第61号 (2016年、沖縄国際大学南島文化研究所)	沖縄国際大学南島文化研究所
南島文化 第31号 (2009年、沖縄国際大学南島文化研究所)	飯田泰彦
南島文化 第36号 (2014年、沖縄国際大学南島文化研究所)	飯田泰彦
南島文化 第38号 (2016年、沖縄国際大学南島文化研究所)	沖縄国際大学南島文化研究所
人間情報学研究〈第21巻〉 (2016年、「人間情報学研究」編集委員会(東北学院大学人間情報学研究所))	梅屋潔
鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書 (2016年、沖縄県立博物館・美術館博物館班編)	沖縄県立博物館・美術館博物館班
花のメッセージ日本・中国・琉球の華ごころ— (2001年、吉田紫峯)	飯田泰彦
琉球大学附属図書館報 びぶりお No163 (2016年、琉球大学附属図書館)	琉球大学附属図書館
ひめゆり学徒隊の引率教師たち—戦後70年特別展— (2016年、ひめゆり平和祈念資料館)	ひめゆり平和祈念資料館
福建調査報告書 一地域研究シリーズ No41— (2014年、沖縄国際大学南島文化研究所)	飯田泰彦
文化庁委託事業報告書 危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究 (2016年、琉球大学国際沖縄研究所)	琉球大学国際沖縄研究所
法政大学沖縄文化研究所所報〈第78号〉 (2016年、法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所、酒井卯作

ぼくらの町に英雄がいた。一沖縄民権運動の先駆者 謝花昇一（八重瀬町教育委員会）	八重瀬町教育委員会
宮良長包音楽祭—石垣市民会館三十周年記念—〈第12回パンフレット〉 (2016年、石垣市)	飯田泰彦
八重山台湾親善交流石垣島公演 国立台東高級商業職業学校民俗芸能夢 台湾原住民の歌舞 一躍動の交流—〈パンフレット〉(2016年、八重山台灣親善交流協会)	飯田泰彦
よのつじ 浦添市文化部紀要 第12号 (2016年、浦添市教育委員会)	浦添市教育委員会
立正大学 大学院紀要 第32号 (2016年、立正大学大学院文学研究科)	立正大学、島村幸一
立正大学 人文科学研究所年報 第53号(平成27年、立正大学人文科学研究所)	立正大学、島村幸一
立正大学文学部研究紀要 第32号 (2016年、立正大学文学部)	立正大学、島村幸一
琉球の方言 第40号 (2016年、法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所
歴代宝案 訳注本 〈第9冊〉 (2016年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
歴代宝案 訳注本 〈第9冊〉語注一覧表 (2016年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
琉球の築土構木 (2016年、一般社団法人 沖縄しまたて協会)	沖縄しまたて協会
私と「地域」とのおつきあい[地域構想研究教育報告No.1] (2011、梅屋潔)	梅屋潔
DVD「市民が語る戦中戦後史」僕たち、私たちにできること (2016年、糸満市教育委員会)	糸満市教育委員会

島じまの踊り・狂言 〈No.1〉

舞踊「船浦口説」

写真は上原連合婦人会による舞踊「船浦口説」（「第8回竹富町婦人芸能大会 さにんばな」2016年11月26日開催、写真提供は竹富町婦人連合会）。舞踊「船浦口説」は、1947年（昭和22）に宮良用秀氏の作詞した歌詞に、大城安子氏によって振り付けられた舞踊です。歌詞には「友利うふだき うし登て 四方の景色を見渡せば エイ あれに見ゆるは鳩間島」と、親島である鳩間島がうたわれています。



西表島古見集落の口承文芸

星野岳義（早稲田大学大学院社会科学研究科修士課程修了）

1 はじめに

沖縄県八重山郡竹富町古見は、西表島の東部地区に位置し、柳田国男『海上の道』にも紹介された集落である〔柳田 1961:146頁〕。以前は、農業が主力であったと伝えるが、現在は、観光業に従事する人が多い。古見の研究は、豊年祭〔宮良 1968〕や結願祭〔大城 1998〕には蓄積があるものの、これに比較すると口承文芸は低調になっている。

ここで、西表島の口承文芸につき、先行研究を整理しておく。那根亨『西表島の伝説』は31件を収録し〔那根 1974〕、星歎『西表島の民俗』は10件を収録する〔星 1981:176-193頁〕。両者とも、竹富町西表の祖納集落の出身であるため、西表島の西部地区に特化していた。竹原孫恭『ばが一島・八重山の民話』には3件を収録するが〔竹原 1978:159-168頁〕、古見で採集した事例はない。山田武男『わが故郷アントウリ』〔山田 1986:157-170頁〕と川平永美『崎山節のふるさと』〔川平 1990:116-120頁〕にも言及があるが、それぞれ廃村となった網取と崎山を取り上げている。これらから、古見を対象とすることには、研究の空白を補う意味で、利益があろう。

筆者は、2016年（平成28）6月から11月まで西表島で住み込みの勤務をし、古見で聞き取りをする機会に恵まれた。聞き取りは、古見公民館において、2016年11月18日と23日と28日、いずれも午後8時から10時30分に実施した。話し手は、親盛ヒロ子さん〔古見出身。1935-〕と、新盛基代さん〔古見出身。1951-〕である。聞き手として、古見在住の仲新城理香館長と石原孝子さんに同席していただいた。そのほか、古見のみなさんをはじめ、公共交通機関である西

表島交通の乗務員にも、ご配慮を賜ったことを付記したい。

聞き取りは、ユンタク〔お喋り〕するなかで自由に語っていただき、ときおり筆者が「人魚の話は知りませんか」と質問する、という方法を探った。途中で記憶が蘇えったり、他者が助言をしたりするときも、そのままとした。翻字に際して、補足は角括弧を用い、省略は三点リーダーを用いたが、公表すべきでない個人名は、三点リーダーを用いずに省略した。確認した17件のうち12件を翻字するが、「ノミの舟」のみ話し手の希望により、過去の音源に基づいている。なお、各タイトルは、筆者が便宜的に付与したものである。

2 ノミの舟

親盛 私の子どものころ、婆さんたちから聞いた話ですが、ノミの話、ノミの舟の話ね。ノミの船は、豆の皮に乗って、3月3日の朝早く、古見の前の海から、ノミがゾロゾロと前の海に出て行くという話。婆さんたち「早く起きなさい、早く起きなさい」婆さんたちに起こされて、これは牛の皮を被らなければ見ることができないと言うけれど。ノミは豆の皮の舟に乗って、竿は藁の芯を差し、今度は鉢巻は白鉢巻をし、ゾロゾロと舟に集まり乗って出て行くというのです。これは、それを見ないといけないと、走って牛の皮を被って見てみると、沢山のノミは鉢巻を巻いて、竿の藁の芯で漕いで漕いで、外海、沖の方へ行ってしまって、これを見た人は誰もいないそうです。〔1999年5月30日に黒島伝統芸能館で行なわ

れた、竹富町婦人連合会の第14回研修大会において、親盛ヒロ子さんが島言葉で発表した「ヌンヌフニスバナス〔ノミの舟の話〕」の音源より。新盛基代さん対訳]

3 浜下りの由来

新盛 夜から、化けた男が来て、ヘビの子どもを妊娠してしまってるから、海、下りて。ちゃんと、3月3日に下りたんだって。そして、流産した子どもがよ、ウナギの子って。ヘビの子だったんだけど、海に下りてウナギになったって。だから、沢山いるこのウナギは、ヘビの子なんだ、子どもがウナギになったって、いうことを言うとるけど。

親盛 昔はだから、必ず3月3日はよ、海に行つて、海で足洗って来る。

仲新城やらなかつたなあ。学校は休みだったのにね、3月3日はね。

石原 前は、半日で〔休みが〕あったよね。

新盛 結局、身籠っていたものが、海に行ったら、3月3日の日に流れたって。それで、3月3日は大切な日だよ、って言って。それが、3月3日の由来みたいだね。

親盛 だから、あれにも3月3日があるだろ、「ノミの舟」にも。だから、「ノミの舟」もそういうもん〔海に流す話〕だから、由来はあるはず、3月3日は。 [2016年11月23日採集、筆者翻字]

4 スズメとツバメ

新盛 昔、お母さんだったかな、誰が亡くなつたって、覚えてないんだけれど。「早く、おいで」って早く呼びかけたんだけど、〔スズメとツバメが〕遠くに行っていたんだって。呼んだんだけれども、スズメは急いで来て、お母さんに会うことができたって。ツバメは機織りして、自分

は機織りを終えてじゃないと行けないと行つていうことで、機を織ったものを巻いて飛んで来たために、白い筋が出来てる。……それで神様怒って、スズメに「あなたはねえ、すぐ孝行して、呼んだら親にも会えたので、お家の周辺で住んでいいよ、村の周辺に住んでいいからね」って、村の周辺に住むようになったんだって。ツバメ〔に〕、「あなたは、こんなんして親の死に目にも会えない、こんなお洒落して来るんだから。あなたは1年に一遍だけ帰ってくればいいよ」っていうことで、1年に一遍だけ飛んで来るようになつたって、渡り鳥になって。 [2016年11月28日採集、筆者翻字]

5 マザピー

新盛 夜、魚を捕りに行くと、幽霊が出てくるって。だから、捕ったら、必ず目を潰しなさいって。出てくるお化けが、目を食べるんだって。だから、目を潰しなさいって。夜、捕ってくる魚は、目を潰さないと駄目ちて。〔目を〕食べられるからって。

親盛 マザピーとかって言ったよな。

新盛 マザピーって聞いた？

親盛 マザピーって言って。海行ったら、これ〔マザピー〕が人を騙してから連れて行く。連れて行ってがよ、魚もいっぱい、捕ってあげたりするだってよ。あの、あれにあるでしょ、キジムナーに。

新盛 だからキジムナーとは、また別よ。だけど、このマザピーが目を食べるから、先に潰しなさい、って。だから、マザピーが捕った魚は、みんな目が食べられて無いんだって。

親盛 そうそうそうそう。そしてがよ、貰つて來たりして、また今日も行つたら、「今日もまた来る」って来るが。してまた大

漁にしてくれてが。今度、見たら、[魚の]目が無いという。[マザピーが]目を食べるから。

新盛 結局、海に行って、自分たちが[魚を]捕ったら、またこれ[マザピー]が来るから、これに惑わされたら困るから、目を潰しなさいって。これが目を潰さなかつたら、あんたは[マザピーに]連れて行かれるから、ちゃんと潰しなさい。そしたら、ちゃんと[魚を]持って帰られるから。

親盛 さっきは[マザピーを]良く見たよ。今でも居るってよ、マザピーは。本当だよ。

[2016年11月23日採集、筆者翻字]

6 「古見の浦節」の由来

新盛 これは役人が与那国に向かうとき、人頭税、税金取りに向かってたら、ちょうど嵐に遭って、行けなくて古見の港に立ち寄って、嵐が来るのを待った。その待っている間に、古見の美女、ブナレーマと恋仲になって、お別れをしなきゃいけないとき。そのときに、「また会いましょうね」ということで……。その後良の入江で里主が、結局、役人が歌ったっていうことなのね。[2016年11月28日採集、筆者翻字]

7 バギナカー

親盛 お爺ちゃんお婆ちゃんなんかがさ、やっぱりバギナカーの湧き水があるさ。そこで顔を洗ったりしたら、色も白くなるし、綺麗になるっていう話は聞いたことがあるさあね。だけど、大底さんが書いてあるようなことは、聞いてないけどさ。……やっぱり、あのころは、みんな川で洗濯したり、水浴びたり、顔洗ったりするのは、そのころはみんな利用してましたからね。

新盛 バギナカーっていうのは、私たちの生活の場所で、とっても必要な場所。そして古見村にとっては、無きゃいけない場所なので。それだけ大切で、また良い所なんだよ、っていうお話しやなかったかと思うんだけどね。

親盛 だから、学校行ったら休み時間……になつたら、すぐバギナカー行って、トンボ捕つたり、エビを釣つたり。エビからトンボから、いろいろ居るさ、ウナギも居るはず。居たよ、そう言えばウナギも。で、「神様だ、神様だ」つってさ、ウナギが居るからよ、言ってたけど。[2016年11月28日採集、筆者翻字]



8 前良橋

親盛 昔ですね、電灯のない時代ですから、橋を渡って歩く人がいたり、また大原から歩いて来たっていう人がいたり。……南の橋[前良橋]から来るときに、猫に会つたんですって。この猫が、化け物と/or/、マヤ[猫]が出るから「夜中この辺、歩かれないと」とて婆さんなんかが話しているのを聞いて……。[2016年11月23日採集、筆者翻字]

9 ヤマピカリヤー

親盛 [牧場に]行つたらさ、ちょうどアブスー[畦道]によ。モノが死んで、もう毛も抜けて、ある程度の格好も抜けてるけど、毛が所々にあるわけさ。それで、自分のところの牛かなあと思って、校長に

言ったら見に行つたら、やっぱり牛ではなくて猫ふじなもんだから……。だから、ヤマネコだったのかなあ、ヤマビカラリー……。 [2016年11月23日採集、筆者翻字]

10 ヒヨドリ坂

新盛 ヒヨドリ坂の方には居るって、お化けが。

親盛 あー、そうそうそうそう。

新盛 あれは、何でって言うと、ヒヨドリ坂のところはガタガタ道なんだけど。古見の方から〔大原に〕行って、オートバイ〔に乗って〕。青年〔青年会〕のなかでの話よ、これは。……オートバイに乗って、行つたって。そしたら、人を乗せたって、後ろに。そしたら、大原まで行つたら、もう居なかつたって。だから、それはまあ、人を脅かすために言ったのか分からんけど、乗せて居なかつたから、あれから怖くてもう行かないよ。……だから、あっちは、お化けが居るって。

親盛 いや、あそこはよ、決まって〔お化けが〕居るよ。居るっていうのはさ、昔……歩いて行つたわけよ〔古見から〕大原に。……行つたら、ヒヨドリ坂のところで物凄い音がして、ダッダッダッダッダッダッっていう音がして、ドオーって夜、音がするわけ。目の前で、黒いのがこう下りて来て。そしたら、みんな立ち止まつてさ、「もう、どうするか。引き返すか、行くか」って。もう、みんな数珠持つてるもんだから、拌んで「いや、大原までは行かれんから、一応戻ろう」と、戻つて来て。ウチなんか家に〔戻つてから〕、イチニイとサン、回す電話さ、昔の電話だから、これを回して親盛に連絡を取つたわけさ。そしたら、「青年部、すぐ寄越すから」って言って、青年部が来て。

あんなこともあったさ。だから、コウモリが何かを落としたのか、イノシシが何かをやつたのか、それは分からんけど、物凄い怖かったよ。黒いのがこう来てよ。いま言う話〔オートバイがお化けを乗せた話〕の、同じ場所。 [2016年11月23日採集、筆者翻字]

11 マジムンの花

新盛 どうして、こんな真っ赤なお花が、お化けの花なのかなあ、っていうのが私たちは、いまだに分からんんだけど。「幽霊が出るところに、真っ赤に咲く」とかつて言って。あの花を見ると、いまだに「幽霊の花だね」って、言うんだけど。最近は明るくなつたから、幽霊も居なくなつて、お化けも居ない時代になつたじゃない? だから、観葉植物として、楽しめているんだけど。前は、この花を触るのも怖くて。

親盛 そばにも行かんかったよ。あれと、もう1つあるさな、蝶々が好きな、トーワタカ。綺麗でしょ、あれ。……あれと、これと、マジムンの花って言って、触らなかつた。 [2016年11月28日採集、筆者翻字]

12 マジムンの正月

親盛 スチ〔節祭〕がお化けのお正月、つって言ってよ。あっちこっち、昼間よそから、あれ〔節祭〕見に行くとか、歩いていたんじゃないかな。スチマジムヌと、あるやして。

新盛 スチの日には、お化けが来る、か。音を立てるなちて。だからそれで、音を立てるなちて言って、静かに居つたんじゃないのか、オバー。……物音も立てるなよ、ってから早く眠つたものさ。……。

親盛 スチだったら、物音立てんで、全然よ。

三線も弾かないけど。あの辺は、スチで太鼓、三線弾いたり、船漕ぎなんかやってるさ、西部なんか。古見はスチつったら、静かにしてる。それで、スチマジムヌみてげれ。 [2016年11月28日採集、筆者翻字]

13 山中で呼ばれた話

親盛 後良〔後良橋〕から下りた……田圃の方に山があって、その山に行って、惑わされて2、3日帰って来ないもんだから、集落の人も心配して捜すつて、あっちこっち呼んで回っても居ないもんだから、亡くなつたっていうふうに考えていたんですかね。そしたら、ある日、居たって、この人が。……連れて来たら、色〔顔色〕も青ざめてからいるもんだから。みんなで心配してやっているうちに、「自分はよ、いっぱい美味しいのを食べて来た」言うて。「ご馳走もいっぱい食べてきた」って言うのが、みんな、この。

新盛 泥団子。

親盛 そうそうそう。粘土のあれ〔泥団子〕を食べたのが、ご馳走みたいに見えたんじゃないですかね。で、あれ〔泥団子〕を食べたって言って、下痢したり何したりするの、みんな泥の垢みたいっていうか粘土だった、っていう話を昔の婆さんに〔聞いた〕。だから、一声呼んだら「はい」って言って返事やつたら、お化けに連れられるよって。

新盛 結局、お化けが呼ぶから一度は、ってこと。呼ばれて行った、付いて行つたって。

親盛 だから、あれは本当の話って言ったよ。どこのアブジー〔爺さん〕って言ったかな、あれよ。 [2016年11月23日採集、筆者翻字]

14 おわりに

古見で継承されている、12件を翻字した。伝統的分類によれば、「ノミの舟」から「マザピー」までが昔話、「古見の浦節」の由来から「前良橋」までが伝説、「ヤマビカリヤー」から「山中で呼ばれた話」までが世間話になる。このたびの聞き取りでは、諸事情により記録しなかつたが、「雨蛙不孝」「ナサマーとミツケーの悲恋」「埋蔵物を探す話」なども、まだ語ることが可能という。

雑駁ながら、12件の補足説明をしたい。「ノミの舟」は、沖縄県石垣市登野城に同名の昔話があるものの〔竹原 1978:36頁〕、内容に相違がみられる。「浜下りの由来」は、「蛇婿入り[TI205]」の一種であるが、ウナギの起源に関心が傾いている。「スズメとツバメ」は、「雀孝行[TI454]」の一種であり、西表島における分布として重要である。「マザピー」によると、魚の目を潰す慣習があったそうで、この慣習は片眼魚の伝説〔高木 1973:119頁〕との関連が想定される。「古見の浦節」の由来は、喜舎場永珣『八重山民謡誌』に詳解があるけれど〔喜舎場 1967:297頁〕、せっかくなので語り口のまま掲載した。「バギナカ」の後半には、ウナギを神聖視する件があり、「浜下りの由来」を理解するうえでも興味深い。「前良橋」は、後述するヒヨドリ坂とともに、古見の南端に位置している。「ヤマビカリヤー」は、イリオモテヤマネコと混同されやすいが、本来は大型の未確認生物を指し、以前から目撃談がある〔横塚 1994:60頁〕。「ヒヨドリ坂」のうち、前半はタクシーの怪談〔報知新聞社 1932:7頁〕の変形であろうが、後半は親盛ヒロ子さんの実体験という。「マジムンの花」は、現在も古見で咲いているそうで、未見のため学名などは不明である。「マジムンの正月」によると、古見では節祭に早寝をするというが、宮城県柴田郡村田町沼辺では正月に朝寝をする〔柴田郡教育会編 1925:347頁〕。「山中で呼ばれた話」

は、「おーい」と呼ばれたら、一度でなく二度で返事をしなさいという教えて、実話と捉えられている。

ところで、「バギナカ」の前半に、大底朝要さん〔古見出身。1934-2013〕の話題が出てくる。これは、2011年（平成23）8月17日に石垣市民会館で行なわれた、石垣市文化協会の「第1回しまむにを話す大会」において、大底朝要さんが島言葉で発表した「古見村に伝わる「バギナカ」の話」のことである。発表は、冊子『第1回しまむにを話す大会』のなかに、大底朝要「古見村に伝わる「バギナカ」の話」として、島言葉と共通語で翻字されている。この冊子は入手しがたくなり、大底朝要さんも他界して聞き取りができなくなった、という事情から共通語を引用してみたい。内容は、不美人が清水によって美人になる、というものである。美人と清水という取り合わせは、沖縄県名護市許田の「許田の手水と美女」とか〔名護市史編さん室編 1989：331頁〕、秋田県横手市田中町の「小野小町の化粧水」とか〔菅江 1976：51頁〕にも確認できる。

皆さんこんにちは。私は西表島古見村生まれの大底朝要と申します。

本日は古見村に伝わるお話を申し上げます。

昔々その昔、古見村に醜い女の子が生まれました。色は黒く、目・鼻・口の形も悪く、これは言葉では言い表せない、筆でも書けない、絵でも書き表せない程の醜さでした。この女の子も人並みに成長し、年頃になると自分の容姿を気にするようになり、世間の目・風評を気にし、外に出ずじまいになり親を恨み、このように生まれた自分を恨み日夜泣いていたそうです。

泣き疲れて寝ていたある日、神様が現れ、可哀想にお前は元々の不美人ではない。私が教えるとおりにすればすぐ人並みになるとさ

とされた。

前の浜の近くにある諸原嶽の入口の方に凹地がある。そこを掘ると清水が湧き出る。この水で毎日、早朝に顔を洗えば、すぐにでも美人になるとの夢を見せたのでした。

女児はいてもたってもおれず、その場所に急行し掘ってみると正に清水が勢いよく湧き出てきました。

女児は夢でさとされたとおりに毎朝顔を洗っていると、たちまち美人になり、心も豊かになり、仕事はする、笑顔で皆さんとの会話もするという変わりようでした。

これを見た村人は、あまりにもめずらしい出来事なので、女児に聞いてみると、湧き水のお陰と解り、そこを村人の生活用水の場として整備し、名前も「バギナカ」と命名し利用したら、その後村人は全員が美人で心豊かになったという「バギナカ」のいい伝えでした。〔大底2011：27頁〕

それから、口承文芸の伝播経路につき、参考となりうる話題に触れておきたい。昔の古見には、小浜島からイトマン〔漁業従事者の通称〕が魚売りに訪れていた。古見に嫁ぐ女性は、竹富島や宮古島から来ることが多かった。新盛基代さんが子どものころ、昔話をしてくれたのは父方の祖母であり、この祖母も竹富島出身であった。親盛ヒロ子さんによると、父親は黒島に友人が多くて、黒島から酒や砂糖を買っていた、と記憶している。大底朝要さんのインタビュー記事には、父方の祖父が竹富島出身であり、また黒島から酒や砂糖を売りに来たとあるから〔大底 2012：34頁〕、このたびの証言とも共通する。ちなみに、竹富町南風見仲の大富集落で採集されている、「ミルク神とサーラ仏」は〔狩俣、丸山編 2003：74頁〕、その北隣である古見では聞かないとのことであった。

このたびの聞き取りから、話し手の高齢化が進行しており、この事実上の最終世代に対する

聞き取りが、急務になると実感した。教育委員会による学術的な調査が俟たれるが、一刻を争う場合には、地域住民による自主的な活動に頼るほかない。中学校の課外活動などで、祖父母に聞き取りをするのは、家族ゆえに打ち解けやすいのみならず、口承文芸の継承という観点か

らも、効果があろう。そのさいは、いつ、どこで、誰に聞いたのかを明記し、差し支えなければ島言葉で語っていただきたい。こうした地道な作業が、いつの日か『広報 たけとみちょう』に連載されることを、切望してやまない。

参考文献

- 大城學 1998. 「古見の結願祭」『沖縄芸術の科学』(第10号)、167-180頁
大底朝要 2011. 「クンムラナイツタイラリル「バギナカ」ヌバナスイ【古見村に伝わる「バギナカ」の話】」(『第1回しまむに（方言）を話す大会』石垣市文化協会) 26-27頁
大底朝要 2012. 「やいま昔語り」(『月刊やいま』(第221号) 南山舎) 34-35頁
川平永美著； 安渓遊地、安渓貴子編 1990. 『崎山節のふるさと』(ひるぎ社)
狩俣恵一、丸山顯徳編 2003. 『琉球の伝承文化を歩く』(No.2) (三弥井書店)
喜舎場永珣 1967. 『八重山民謡誌』(沖縄タイムス出版部)
柴田郡教育会編 1925. 『柴田郡誌』(柴田郡教育会)
菅江真澄著； 内田武志、宮本常一編； 内田武志解題 1976. 『菅江真澄全集』(第6巻) (未来社)
高木敏雄 1973. 『日本伝説集』(宝文館出版)
竹原孫恭 1978. 『ばがー島・八重山の民話』(大同デザインセンター)
名護市史編さん室編 1989. 『名護市史叢書』(No.7) (名護市教育委員会)
那根亨 1974. 『西表島の伝説』(那根亨)
報知新聞社 1932. 「円タクが幽靈を乗せた話」(『報知新聞』10月3日朝刊) 7頁
星歎 1981. 『西表島の民俗』(友古堂書店)
宮良高弘 1968. 「「黒マタ・白マタ・赤マタ」の祭祀」(『札幌大学紀要』教養部論集1) 85-103頁
柳田国男 1961. 『海上の道』(筑摩書房)
山田武男著； 安渓遊地、安渓貴子編 1986. 『わが故郷アントウリ』(ひるぎ社)
横塚真己人 1994. 『追いかけて、イリオモテヤマネコ』(宝島社)

フクギは“LUCKY TREES”

陳 碧霞(琉球大学農学部助教授)

沖縄の島で、フクギを知らない人はいないのではないだろうか。しかし、フクギに対して好感を持っている人は少ないかもしれない。理由としては、実が臭い、落ち葉の掃除が大変等が挙げられる。そのためフクギを伐採して、根こそぎ切って捨てる人もいる。

一方、都会の人たちは沖縄の昔ながらの集落に魅了され、わざわざ沖縄の北部まで何回も訪れる。沖縄に行くたびに必ず備瀬のフクギ並木を見に行くと言う人もいる。なぜなら、フクギ屋敷林がある緑の風景に癒されるから”と観光客に教えられた。

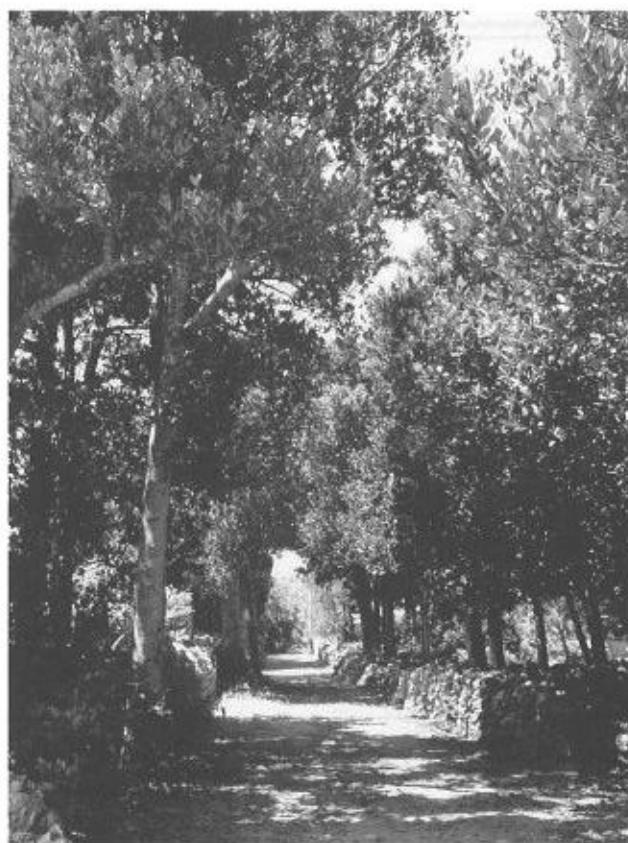
実際に、本部町備瀬区や竹富町のような観光先進地では、フクギは観光資源として既に成立していると思う。竹富町はもちろん、近年、備瀬のフクギ並木も観光客に高く評価され、大手観光会社の観光ツアーメニューに入るようになった。ツアーバスドライバーさんによると、沖縄の海はきれいなことでよく知られており、海がきれいな集落はどこにでもあるが、フクギ並木がある集落はここしかない。そう言われると、確かにフクギ並木が整然と残されているところは多くないだろう。備瀬以外では、石垣島、竹富島、波照間島でも見事なフクギ屋敷林が見られる。

琉球大学で、仲間勇栄名誉教授とフクギ屋敷について行った共同研究では、風水集落中の風水林としての「屋敷抱護」に注目した。約十数年前から、沖縄本島とその近辺の離島における屋敷林を含めたフクギ巨木を測量した。フクギ屋敷林の巨木調査により、沖縄の伝統集落の発生、発展が分かった。また、沖縄の島嶼型風水集落の特徴は、風を防ぐための「藏風」機能を強化したことであると分かった。琉球王府時代から、フクギ屋敷林は集落風水をよくするために植えられたため、フクギの樹は“Lucky trees”である。

研究室のゼミ生たちは、去年から波照間島のフクギ屋敷林を測量している。約300本が測量できないものを除いて、DBH（胸高直径）が5cm以上のフクギが約2827本あった。その中で一番太いのが66.5cm（樹齢約266年と推測）、一番高いのが約17.7mである。

波照間島のフクギ屋敷林の特徴は、DBHの小さいものが極端に少ないとある。そのことから、他の地域よりも手入れしていると推測できる。なぜなら、防風機能を維持するために、自然更新のものを常に取除いたからだ。

まとめると、集落住民が掃除に大変苦労されるフクギ、観光客を癒すフクギ、観光業を潤すフクギ並木であるといえる。最後になるが、この場を借りて、これから風水的縁起のいいフクギの活用法・保全策を、住民の皆さんとよく考えていただければと思う。



竹富町史の刊行物一覧

No.	書籍名	発行年度	税抜価格
1	竹富町別巻② 竹富町史文献目録	1990年度	△
2	竹富町史 別巻③ 写真集「ぱいぬしまじま」	1992年度	¥2,500
3	竹富町史 第十巻 資料編「近代1－喜宝院蒐集館文書」	2004年度	¥2,500
4	竹富町史 第十巻 資料編「近代2－必要書・必要書類集」	2001年度	¥2,500
5	竹富町史 第十巻 資料編「近代3－新城村頭の日誌」	2005年度	¥2,500
6	竹富町史 第十巻資料編「近代4－官報にみる八重山」	2006年度	¥2,500
7	竹富町史 第十巻資料編「近代5－波照間島近代資料集」	2009年度	¥2,500
8	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅰ」	1993年度	¥2,000
9	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅱ」	1994年度	¥2,000
10	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅲ」	1996年度	¥2,000
11	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅳ」	2000年度	¥2,000
12	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅴ」	2002年度	¥2,000
13	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅵ」	2003年度	¥2,000
14	竹富町史 第十二巻 資料編「戦争体験記録」	1995年度	¥3,000
15	竹富町制施行50周年記念誌 「ぱいぬしまじま50」	1998年度	¥2,500
16	竹富町史 資料集① 「鉄田義司日記」	1999年度	△
17	竹富町史 第二巻 竹富島	2011年度	¥3,000
18	竹富町史 第三巻 小浜島	2011年度	¥3,000
19	竹富町史 第五巻 新城島	2013年度	¥3,000
20	竹富町史 第六巻 鳩間島	2014年度	¥3,000

編集後記

『竹富町史だより』(第39号)を発刊することができました。同書(第37号)で原稿の募集を呼びかけたところ、大勢の方に関心を持っていただき、多くの問い合わせがありました。ありがとうございました。

本号は投稿文を中心に構成し、大城肇「鳩間島の過去と未来」、加治工真市「《鳩間口説》の変遷」、星野岳義「西表島古見集落の口承文芸」、陳碧霞「フクギは“LUCKY TREES”」の4本を収録しました。どれも資料性があり、同時に読み応えのある論考です。

とりわけ、大城論文、加治工論文は、1月29日開催のシンポジウム「鳩間島の過去・現在・未来を語ろう！」とリンクする内容の論考です。同シンポジウムの参考にしていただきたく存じます。

改めて原稿の募集について、当初、事務局も呑気に「来るものは拒まず」の精神で、字数制限など設けませんでした。すると本格的な学術論文の投稿も数本あり、対応に追われつつ、うれしい悲鳴をあげることになりました。

よって、今後は『竹富町史だより』の性格上、原則として字数の上限を10,000字とすることにしました。エッセイなどの短編は、これまで通り何字でもOKです。どうぞ御理解のほどよろしくお願ひします。

というわけで、引き続き原稿大募集です。投稿や問い合わせなどは、お気軽に奥付のメールアドレスまでお願ひ申しあげます。

2017年1月29日発行

竹富町史だより 第39号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11-1

TEL 0980-82-6191

e-mail : taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp